

宇仁義和・加藤幸治編

ロイ・チャップマン・アンドリュースの 鯨類調査写真

—— 鮎川 1910 年 ——

- ① インディ・ジョーンズ、鮎川を往く— 100 年の時間を超える展示の試み —
加藤幸治
- ② ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査と東洋捕鯨鮎川事業場
宇仁義和
- ③ 写真引き 100 年前の鮎川のすがた
加藤幸治・宇仁義和・成澤正博
小野世椰・加藤和佳香・小泉友美
佐藤志穂・高橋瑠美奈・吉田真子
- ④ アンドリュース著『砲とカメラで鯨を追う』に掲載された
鮎川撮影の写真とキャプション
加藤幸治・宇仁義和
小泉友美・吉田真子
- ⑤ ロイ・チャップマン・アンドリュース鮎川調査全写真
宇仁義和
稲辺大樹・小島勇紀・菅原 陸
細谷敦生・渡部 渉



ゴビ砂漠のロイ・チャップマン・アンドリュース (1928 年)
Image #338695 American Museum of Natural History Library

インディ・ジョーンズ、鮎川を往く

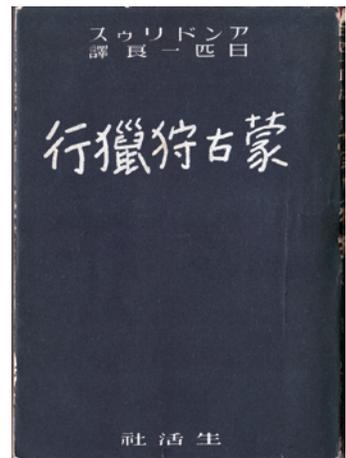
— 100年の時間を超える展示の試み —

加藤 幸治

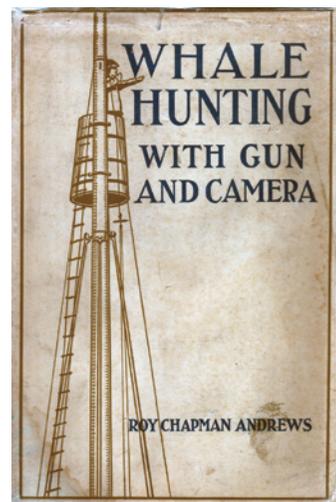
ロイ・チャップマン・アンドリュース (Roy Chapman Andrews 1884-1960) は、アメリカ合衆国の著名な探検家・古生物学者である。本国では、子ども向けの科学読みものや探検記の著者として知られ、その活躍からハリウッド映画『インディ・ジョーンズ』シリーズの主演、インディアナ・ジョーンズのモデルとも言われている。彼は、中央アジア探検隊を率いて、ゴビ砂漠で恐竜の卵を発見したことで知られ、その探検記である『蒙古狩獵行』が日本でも昭和16年に翻訳出版されている。また、ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館に奉職し、博物館史にも足跡を残した。

1910年、アンドリュースは、アメリカ自然史博物館の学芸員として鯨類の調査のために来日した。彼は、日本列島や朝鮮半島の捕鯨基地をめぐり、クジラの生物学的な調査を敢行した。この調査旅行によって、彼は貴重な鯨類の生態に関するデータと、多くの標本を持ち帰り、1916年には極東での調査をまとめた探検記『砲とカメラで鯨を追う』“Whale Hunting With Gun And Camera”を出版した。2016年は、アンドリュースが同書を出版した年から数えて、ちょうど100年の記念の年であった。アンドリュースは、多くのページを割いて宮城県石巻市鮎川の捕鯨を紹介している。そして、鮎川で鯨類の標本採集や調査を行い、収集された標本の一部はアメリカ自然史博物館の常設展示場に展示されてきた。

東北学院大学歴史学科民俗学実習の文化財レスキュー活動では、東日本大震災で被災した牡鹿半島の文化財等の保



アンドリュース著『蒙古狩獵行』
(生活社、1941年)の表紙



『Whale Hunting With Gun And Camera』
の表紙 (1916年刊行)

企画は、宇仁氏の協力のもと、民俗学実習の3年生が行い、解説書も筆者と宇仁氏が監修するかたちで学生たちが企画・執筆・編集した。

この展示の会場では、学生が来場者に聞き書きを行い、ひとつひとつの写真の時代背景や、映り込んでいるもの、当時の景観とその後の変化等についてのデータを収集した。本報告書で紹介する「写真引き」は、学生たちが聞き書きで収集したデータと、成澤正博氏（鮎川の風景を思う会代表、元牡鹿支所長）からご教示いただいたデータ、加藤が民俗学的な関心から補ったデータを、学生たちとともに編集したものである。

ところで、「写真引き」とは絵や古写真等に番号をつけていき、写真にうつっているものについての解説を加えるものである。これを本格的に行った最初の例は、澁澤敬三らが『絵巻物による日本常民生活絵引』（角川書店、1964～68年）として出版したものである。これは、日本の絵巻物のさまざまな場面に番号をつけて、生活や民具、しぐさなどの身体技法について解説を試みたものである。これについて渋沢自身も著書『祭魚洞襦考』（岡書院、1954年）で、「字引と稍似かよつた意味で、絵引が作れぬものかと考えた」（616頁）としてその意義を述べている。また、澁澤敬三の薫陶を受けた宮本常一も、『絵巻物に見る日本庶民生活誌』（中公新書、1981年）を出版し、絵巻物に描き込まれた民具について詳細に論じている。その後も、例えば須藤功が『写真で見る日本生活図引』のシリーズを出版（弘文堂、1988～89）、民俗学関係者のみならず生活の記録として広く活用されてきた。

近年も、例えば京都市文化市民局文化財保護課が、京都の古写真に番号をつけて解説した京都市文化財ブックス第15集『一枚の写真—近代京都庶民生活写真引き—』（同課、1999）や、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターが、の報告書として絵画や版画の絵引を試みた『18世紀ヨーロッパ生活絵引—都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋—』（同研究所、2015年）を刊行している。また、渋沢栄一記念財団は、「実業史錦絵絵引」として近代のモノづくり、産物、職業など、産業シーンを描いた錦絵に附番して解説するウェブサイトを立ち上げた(<http://ebiki.jp/index.html> 2016年1月16日閲覧)。

前述の展示での調査の成果として、本稿では450枚を超えるアンドリュースが鮎川で撮影した写真から選んだ19点を対象に、写真を用いた絵引、すなわち「写真引き」を試みる。具体的な作業は、まず、写真の詳細観察によって附番するポイントづけを高橋瑠美奈・吉



展示パネル

田真子・小泉友美・小野世椰が担当、成澤正博氏への聞き取りを加藤和佳香と佐藤志穂が担当（本学歴史学科3年生）、アンドリュースの著書『砲とカメラで鯨を追う』に掲載された写真に付されたキャプションの翻訳を筆者と吉田真子・小泉友美が担当（本学歴史学科3年生）、それらの作業を集約して最終的に加藤（幸）が編集を担当するかたちで進めた。

本稿の「写真引き」は、石巻市鮎川の石巻市復興まちづくり情報交流館・牡鹿館、および東北学院大学博物館にて、企画展「アメリカ人博物学者 ロイ・チャップマン・アンドリュース — 100年前の牡鹿半島の風景 —」（仮題）として2017年度に展示する予定である。つまり、2016年度に鮎川で聞き書きを行って作成した「写真引き」を、再び鮎川で展示してさらに情報を追加しようとするものであり、その意味では本稿は中間報告的なものである。

継続的な活動のなかで、地域のくらしのデータを着実に集積していきながら、文化における復興の一材料として活用していきたい。



会場となった石巻市復興まちづくり情報交流館・牡鹿館



聞き書きの様子

参考文献

- アンドリュース（日匹一良訳） 1941 『蒙古狩獵行』 生活社
 加藤幸治 2017 『復興キュレーション — 語りのオーナーシップで作る伝える“くじらまち” —』 社会評論社
 京都市文化市民局文化財保護課編 1999 『京都市文化財ボックス 第15集 一枚の写真—近代京都庶民生活写真引き—』 京都市文化市民局文化財保護課
 澁澤敬三 1954 『祭魚洞襍考』 岡書院、のち澁澤 1992 『澁澤敬三著作集 第一巻 祭魚洞雜録 祭魚洞襍考』 平凡社に収録
 須藤功編 1994 『【縮刷版】写真でみる日本生活図引1~5』 弘文堂
 『ヨーロッパ近代生活絵引』 編纂共同研究班編 2015 『18世紀ヨーロッパ生活絵引—都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋—』 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター

- 宮本常一 1981 『絵巻物に見る日本庶民生活誌』 中公新書
- ロイ・チャップマン・アンドリュース (長谷川善和訳) 1995 『恐竜探検記』 講談社
- ロイ・チャップマン・アンドリュース (小島郁生訳) 1994 『恐竜探検記』 小学館
- Ann Bausum 2000 *Dragon Bones and Dinosaur Eggs A Photobiography of Explorer Roy Chapman Andrews*, NATIONAL GEOGRAPHIC SOCIETY.
- Charles Gallenkamp and Micheal J. Novacek 2001 DRAGON HANTER, Viking Penguin. (岩井木綿子・中村安子 藤村奈緒子訳 2006 『ドラゴンハンター —ロイ・チャップマン・アンドリュースの恐竜発掘記—』 技術評論社)
- Roy Chapman Andrews 1952, 1953, 1954 *Beyond Adventure The Lives of Three Explorers*, New York Duell, Sloan and Pearce Little, Brown and Company. (小野武雄訳 1958 『恐龍 —怪獣・猛獣・海獣探検秘話—』 鳳映社)
- Roy Chapman Andrews 2013 (初版は 1943) *Under a Lucky Star*, Borderland Books.
- Roy Chapman Andrews 1916 *Whale hunting with gun and camera*, D. APPLETON AND COMPANY.

謝 辞

本報告中の移動博物館実施は、JSPS 科学研究費補助金「ポスト文化財レスキュー期の博物館空白を埋める移動博物館の実践研究」(基盤研究 C: 2015-2018、課題番号 15K01148) の補助を得て実施した。

Life and Work

—暮らしと仕事—

明治43年、アンドリュースは舞臺から船で社鹿半島入りし、鮎川の地を踏みました。鮎川で「カインヤ」と呼ばれる山口県東洋捕鯨が、鮎川に最初に事業所を構えたのが明治39年（当初は東洋漁業）ですから、近代捕鯨の捕鯨基地として発展をはじめた鮎川港のすがたの記録といえます。
湾内に浮かぶのは捕鯨網の帆船と思われ、左奥に大洋漁業の事業所となる場所に立っているのは、大東漁業の事業所です。手前に見える大量に干された鯨の皮は、「伊佐奈」や「小林工場」といった肥料工場群です。洋犬を連れだ女性たちが立っているのは、鮎川西町の「炭会社」の蔵の山神社あたりです。



明治43年の鮎川風景 27353



鮎川に暮らす女性たち 26838



キャッチャーボート 27362

4

5

Creating Prosperity

—鮎川の栄え—

当時の捕鯨船（キャッチャーボート）は、近代捕鯨のために改良された蒸気船を海外から購入したものでした。写真の船には「アイランド丸」と見えるので、欧米に事業所を構えていた内外捕鯨の蒸気船です。当時は、船と砲手がセットでしたので、捕鯨砲を打つ砲手もノルウェー人を雇い入れました。アイランド丸の砲手はジャコブセンという人物でした。
アンドリュースは、実際に捕鯨船に乗って写真を撮影しています。金草山沖で捕獲したクジラは、キャッチャーボートの再航で曳航し、鮎川浜の事業所で解剖されました。ちなみに、アンドリュースは著書のなかで、サメと鯨鯨を釣り上げたことも自慢げに書いています。



捕鯨船・アイランド丸 27359



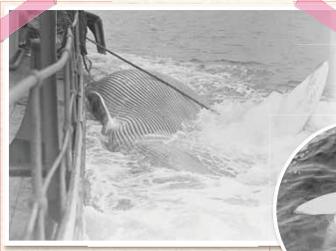
ノルウェー人たち 27370



獲いを定むるノルウェー人砲手 26865



初期の網先はこうだった 27364



大型クジラを曳航して鮎川へ戻る 26874



歯には、サメが咬まれることも 26998

6

7

Memories of the Sea

— 海の記憶 —



鮫川の男たちは、海でつながっていた。
26856



27206

アンドリュースは、鮫川で採集した鯨骨を、ヒレや骨、生殖器など部位ごとに写真撮影しています。アメリカに持ち帰る骨格標本が、どのように採集されたかの証拠として、また調査を面白くするために、標本のサイズを示すための協力の人々を物差しとして映し込んでいます。この調査は東洋捕鯨の全面的な協力のもと行われたことがこれを見てわかります。結果的に、当時の鮫川の人々の記録ともなっており、貴重な写真といえます。鮫川の人々も、写真を撮られる経験は初めてだったでしょう。



27223



26897



26886

12

19

Memories of the Sea

— 海の記憶 —



27275

巨大なマッコウクジラを前に、東洋捕鯨の幹部や解剖長と申しき人物などが、カメラを構えるアンドリュースを見つめています。アンドリュースが記録した明治の鮫川の写真には、近代という新しい時代と重なるものがある。現場の男たちのすがたがあります。アジアの新興国・日本のなかの飛躍に位置する鮫川という小さな浜は、捕鯨というグローバルな産業のまさに最前線でした。のちに世界三大漁場に数えられる金華山沖は、太平洋の鯨類の研究には最適なフィールドです。アンドリュースが100年前の鮫川を写真におさめたことは、偶然の産物などではありませんでした。東日本大震災からの復興は決して順調とはいえませんが、現代を生きる私たちのすがたは、今から100年後の人々にどのように映るのでしょうか。明治の鮫川の写真は、私たちに様々なことを問いかけてきます。

14

15

ロイ・チャップマン・アンドリュースの 鯨類調査と東洋捕鯨鮎川事業場

宇 仁 義 和*

ロイ・チャップマン・アンドリュース Roy Chapman Andrews が初めて日本に来たのは1909（明治42）年9月のこと。アメリカ合衆国の著名な調査船アルバトロス号 Albatross I によるフィリピン・インドネシアの海洋調査に合流するため、シアトルから日本郵船の貨客船安芸丸に乗船し、横浜に入港したのに始まる。翌1910年2月、調査を終えたアルバトロスは長崎に入港、そこでアンドリュースは、日本で鯨類調査を行うためにひとり下船する。東洋捕鯨株式会社の全面的な協力を得て、史上初となる北西太平洋の鯨類について、生物学的調査が実現することになったのである。最初の調査地は和歌山の紀伊大島で、わずか2週間ほどの間に8頭の鯨を調べ、シロナガスクジラとイワシクジラ、そしてシャチの全身骨格標本を得ることに成功する。和歌山での漁期が終わると、次ぎに向かったのが鮎川だった。

鮎川では60頭以上の鯨を調べ、リクゼンイルカを新種記載し、イワシクジラの長大な論文をまとめる一方、巨大なオスのマッコウクジラの全身骨格を収集した。組み上げられた骨格標本は、1930年代からアメリカ自然史博物館で常設展示されることになる。鯨類調査では数多くの写真を撮影し、論文に用いた。同博物館に保管されているアンドリュースが撮影した鮎川の写真は450枚を越える。多くは調査目的のクジラの形態や骨格、その部分のアップといったものだが、捕鯨船に同乗しての捕獲ドキュメントや解剖の様子を写したもある。さらには、風景や人物を写した、まったく私的な興味で撮影されたものまであり、これらこそ今日からすれば他に得がたい100年前の鮎川を記録した貴重な資料となっている。写真はすでに、ナショナル・ジオグラフィック誌や『砲とカメラで鯨を追う』、そして研究論文で発表されているが、刊行された写真は当時の印刷技術から品質が不十分なものであった。風景や風俗の写真の相当数は未発表のままだったが、最近になって日本や韓国の写真が紹介されるようになってきた。

ここではアンドリュースの鮎川での調査を振り返るとともに、関連の文書などから

*東京農業大学（オホーツクキャンパス） unisan@m5.dion.ne.jp

1910年当時の鮎川の捕鯨事業場の様子を見てみたい。

なお、本編に収録された写真のほとんどはガラスネガ（ガラス乾板）を複写したものであり、プリントに比べて階調表現などが相当に優れて画質になっている。

鮎川での鯨類調査

アンドリュースが鮎川に滞在したのは、1910年の5-8月である。紀伊大島からの移動の日付や経路は不明だが、塩釜ホテルの写真の注記から、鮎川へは塩釜から船で到着したことがわかる。鮎川で調べた最初のクジラは5月20日の観察となっている。アンドリュースの調査日誌を見ると、5月20-29日の10日間に、はシロナガスクジラ2頭（うち1頭は胎児）とナガスクジラ8頭、計10頭を調べている。後にも見るが、この頃の鮎川ではナガスクジラが主要な捕獲対象種だった。6月になると調査の主体はイワシクジラとなり、アメリカに持ち帰りはしなかったがザトウクジラの骨格標本作製して観察したほか、カマイルカやセミイルカ、リクゼンイルカを調べている。この3種のイルカは太平洋にのみ分布するため、ヨーロッパや合衆国東部が科学の中心地であった当時としては知見が少ない仲間だった。20世紀初頭でも太平洋の鯨類に関する報告はきわめて少なく、鯨類研究にとって、太平洋は未知の大海として残されていた。アンドリュースはそこに目を付けたのである。彼は6月29日にコビレゴンドウを詳しく観察しカリフォルニアで報告された個体とは異なり、全身が黒色ではなく腹部が灰色であることに注目している。世界の海に分布するコビレゴンドウは、いくつかの個体群に分かれているが、アンドリュースは北西太平洋個体群の外部形態の特徴について初めて報告したことになる。7月になるとマッコウクジラが捕獲されるようになったが、雌や雄でも小形の個体ばかりであった。手紙を見ると、6月初めにすでにアンドリュースはマッコウクジラの骨格を持ち帰ることを考えていたようで、博物館に対し、良い標本が得られる7月下旬まで滞在期間の延長とそのため調査資金の送金を頼んでいる。待ち望んでいた大型のマッコウクジラを得たのは7月22日頃で、手紙によると豊漁のため解剖夫の処理が追いつかず、骨格にするのに10日以上、横浜か神戸で船積みするには2週間以上かかると見積もっている。

結局、アンドリュースの鮎川滞在は操業が終了した8月下旬におよび、観察したクジラの最後の日付は8月23日となっている。手紙によれば、台風がいくつも来襲して横浜との鉄道が寸断されたこと、輸送用の木箱の製作に時間を要したことなどにより、滞在期間を延ばしたようである。3ヵ月以上に及んだ鮎川調査の間で、彼が記録を付けた鯨類は4科7属9種55個体に上る。このうち論文として発表されたのは、イワシクジラ1本とリクゼンイルカの記載論文の計2本である。イワシクジラの論文は、図版を含め約160ページの大型論文として出版され、現在もアンドリュースの主要論文と見なされている。調査内容のほとんどは鮎川のものだが、骨格だけは紀伊大島の個体のもの用いられた。リクゼ



図1 リクゼンイルカのタイプ標本。保存状態は非常に良い

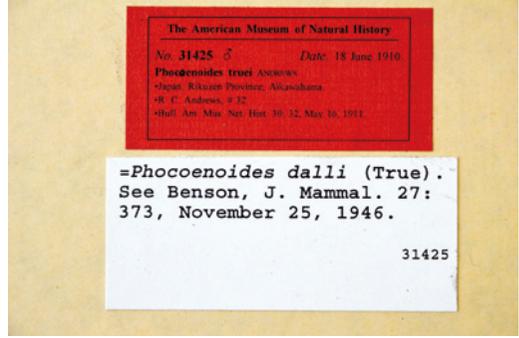


図2 タイプ標本を示す赤色のラベル。1910年6月18日、陸前鮫川と記されている。下の白いラベルはイシイルカと同一と訂正した論文を示す



図3 カマイルカの標本では、金華山一の鳥居が描かれたマッチ箱が使われている



図4 講演会で用いられた着色スライド（ガラスランタン）。図1-4はアメリカ自然史博物館蔵

ンイルカは新種として報告した記載論文である。現在、リクゼンイルカはイシイルカの色彩変異で、別種としては扱われていない。そのため、アンドリュースが与えた学名は無効となっているが、10年程前にリクゼンイルカは独立した個体群で亜種として分けるのが適切という考えが提出された。これが受け入れられれば、アンドリュースが与えた学名は亜種レベルで通用するようになる。現状でも鮫川で採集されたリクゼンイルカはタイプ標本には違いなく、現在もアメリカ自然史博物館では一般の標本とは別のタイプ標本室に大切に保管されている。標本の状態も良好だ（図1、2）。この2種以外、コビレゴンドウなどいくつかの観察事例が単行本で紹介されている。

標本といえば、アンドリュースはマッチ箱を小さな骨片の入れ物に使っている。カマイルカの標本では、金華山一の鳥居とおぼしき図柄があしらってある。ふすまの裏張り使われた反故紙や押し葉標本の乾燥用の新聞が、他には残っていない貴重な資料として見出されたことがあるが、これも思わぬ形で残された資料のひとつといえるだろう（図3）。アンドリュースは日本や朝鮮での鯨類調査について、スライド報告会を何度も開いていたようで、その際に用いられたガラスランタンと呼ばれた着色スライドも残されている（図4）。

おそらく何度も鮎川とそこでの捕鯨の話がニューヨークを中心に、アメリカ国内で話されたものと思われる。

明治大正期の東洋捕鯨鮎川事業場

アンドリュースが滞在した東洋捕鯨鮎川事業場には、どのような設備や建物があったのか。その疑問に答えてくれる資料が宮城県公文書館に保管されている。「明治43年2-0149農商工」という簿冊のなかに、東洋捕鯨が明治43(1910)年1月27日付けで農商務大臣宛に提出した捕鯨根拠地設置許可願がある。ここには鮎川事業場の具体的な設備の名称や規模が記され、鮎川事業場の設計図が添付されている(図5)。これを見ると、事業場には鯨体を解剖する設備に引揚解剖(斜路、スロープ)と巻揚解剖(ボック)の2つがあり、それぞれにウインチが備えられていたこと、鯨肉用に海水を散布して温度を下げ血液を滴下させる冷却場があること、製造場所として鯨肉の裁割場や塩蔵場のほか、缶詰を製造し、また缶自体を製造していたこと、採油設備があったことなどがわかる(図6、表1)。従業員用の宿舎は2つあり、事業夫用と事務員用に分かれていたこと、沢水を引いた簡易的な水道設備も用意されていた。印象的な鯨骨ゲートは示されていないが、事業場全体での位置や写真との照合から、矢印で示した事業夫宿舎と裁割場の間ではないかと想像している。ボックの滑車を動かしていたウインチは、ずいぶん遠い場所に置かれた印象である。設計図と実際の事業場とは細部では異なる部分もあったのだろうが、アンドリュースの写真を読み解く「写真引き」には役立つと信じる。

東洋捕鯨は位置図も添付しており、これには岡田源太郎鯨肉製肥場や西村惣四郎鯨肉製肥場の名前が見える(図7、8)。写真に見える天日干しの風景は、東洋捕鯨とは別の事業所だったようだ。簿冊「大正元年2-0027農工商」には、同45年1月17日付けで大日本水産が農商務大臣に提出した設置願があり、事業場付近図が含まれている。これには、鮎川と十八成浜に存在また計画された5事業場が示されており、捕鯨各社が競い合って牡鹿半島に事業場を設けた様子がよくわかる(図9)。

事業場の見取り図がわかったところで、東洋捕鯨の社内文書「事業場長必携」から、鮎川事業場の操業の様子を見てみたい。鮎川事業場は東洋捕鯨の主力事業場として存在し、1909-1944年の累積捕獲数は同社最大の5,717頭(脊美2、白長須105、長須647、座頭49、抹香2,649、鯧2,265)に上った。同時期の2位は朝鮮南東部の蔚山(うるさん)で3,212頭だから飛び抜けて多い数字である。単年度で最大の捕獲は1918年度の401頭だった(脊美0、白長須0、長須45、座頭0、抹香253、鯧103)。鮎川の漁場である金華山沖はマッコウクジラの漁場として知られており、現在でもその認識が強い。しかし、事業場開設当初5年間は、ナガスクジラとイワシクジラが多く、マッコウクジラの捕獲が増加するのは1914年度からで、逆にナガスクジラは1919年度以降はほとんど捕獲が見られない。つまり、

元々はナガスクジラの漁場であったものが捕獲数が少なくなり、結果としてマッコウクジラの漁場として操業されてきたといえる。1931-1935年度に捕獲数が減少しているのは、世界的な鯨油価格の下落による生産調整だと思われる（表2）。

砲手については1914年以降の記録が残されている。年度ごとに見るとノルウェー人砲手は1931年（昭和6）まで見られ、実数は最大で7人、その割合が高かったのは1924年度までで14-50%、それ以降は0-13%に低下しており、当時としては日本人砲手の割合が高い事業場だった。砲手はノルウェー人ばかりといった状況は、東洋捕鯨の鮎川事業場では1910年代後半になると当てはまらないようだ。

アンドリュースは調査日誌にノルウェー人砲手の名前や連絡先を記している。現れる名前は、Gundersen, A. Kitterson, Melsom, M. Hansen, H. Hansen, O. Bogen, N. Skontorf, H. Ellefsen, F. Olsen, A.E. Hurum, Reidar Jacobsen, M. Jacobsen, N. Bogen, J. Jorgensen, S. Samualsen, C. Larsen, Y.E. Andersen, F. Gjertsen, A. Augustine, Neilsen など20名と多く、1910年当時は鮎川でも砲手の主体はノルウェー人だったと想像される。ただし、アンドリュースのメモには他の捕鯨会社の砲手が含まれている可能性も考えられる。調査日誌のメモをもう少し見ると、おそらく鯨1頭の価値として冬はナガスクジラ 5,000-6,000 千円、イワシクジラ 1,500 円、ザトウクジラ 6,000 円、シロナガスクジラ 4,000-8,000 円、夏はナガス 1,500-1,800 円、イワシ 500 円、マッコウクジラは食用不適なため夏冬同じで 2,500 円などと記している。反対のページには、ヒゲ板の情報が見え、1頭あたりのヒゲ板はシロナガス 500 ポンド（1ポンド=約450g）、イワシ 70-80 ポンド、ナガス 300 ポンド、ザトウ 100 ポンドで、100ポンド（約45kg）の価格はシロナガス 8 円、ナガス 15 円、イワシ 3 円、セミクジラ 420 円という。これらのメモは、他では得られない外部の観察者による現場の記録として注目される（図10）。

捕鯨船については、事業場長必携には1932（昭和7）年度から3年分の記録がないので、1914-1931年度分を見てみたい。期間中に鮎川に1日でも在籍していた捕鯨船は年度あたり5-12隻であった。10年前後続けて在籍した捕鯨船がある一方、飛び飛びで着業する船や10年以上間隔を置いて来航する場合など、捕鯨船の着業状況はさまざまだったようだ（表3）。東洋捕鯨は樺太から台湾まで事業場を抱える大会社で、捕鯨船は漁期にあわせて回航していたので、このような状況になっていたのだろう。なお、当初から操業していたアヴァロン丸が1924年度以降見られなくなるのは、最初の日本人砲手の夏目市太郎と共に前年度に行方不明になったためである。1916年度以降は、東洋捕鯨の第二次合併により、内外水産や大日本水産、紀伊水産の捕鯨船が合流している。年度あたり最高の捕獲数を記録した1918年度について匂ごとに詳しく見ると、最も長く操業していたのは第一博運丸で3月末から12月始めにわたる250日間、短い船では1月未満だったことがわかる。天富丸は盛夏ははさんで2回来港している。同時に在籍していた隻数は4-6隻の期間が多く、最大同時在籍数は6隻で11月のことだった（表4）。7-8隻の捕鯨船が数えられるアンド

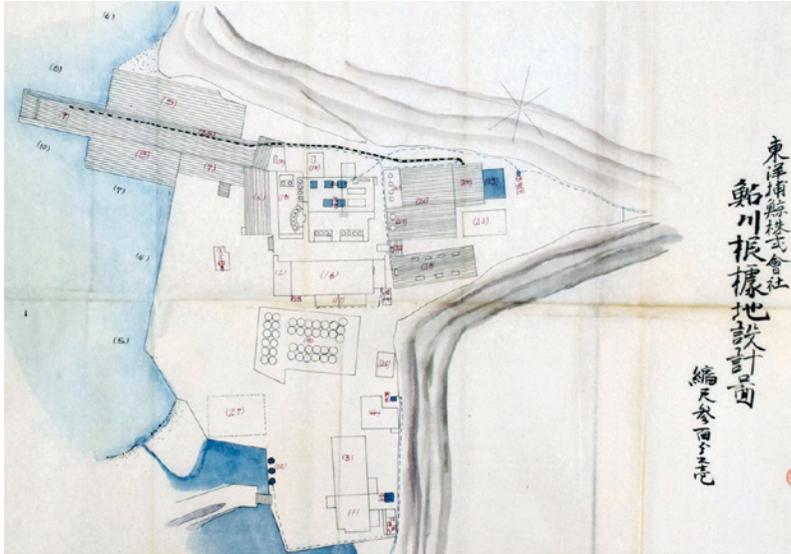


図5 東洋捕鯨が農商務大臣宛に提出した捕鯨根拠地設置許可願の添付の事業場設計図。宮城県公文書館蔵



図6 申請書類に記載された設備一覧は鯨川根拠地設計図に番号で示されている。番号は打ち直した。矢印は鯨骨ゲートの推定位置

表 1. 鮎川事業場設備一覧

建物名	摘要	間数	坪数	
1 事務所	木造曾木葺	4.5×4	18	事務所応接所、食堂寢室など付属
2 宿舎	木造曾木葺	4×6.5	26	事業夫用
3 宿舎	木造曾木葺	4×2.5	10	事務員用
4 炊事場	木造杉皮葺	5×2.5	12.5	
5 引揚解剖場	松丸太打込杉材張	4-5×16		鯨体引揚げ解剖用
6 裁割場	木造杉皮葺	3×6		海水注入により冷却
7 裁割場	木造鋳力板葺	2.5×7.5		海水注入により冷却
8 冷却場	木造杉皮葺	4.5×8		海水散布で血液滴下冷却
9 棧橋	松丸太打込杉材張	3-4×28.5		径6分スチールワイヤー 300尺2台、鯨体解剖用
10 引揚解剖ウインチ場	木造杉皮葺	2.17×3		鯨体引上げ用
11 巻揚解剖ウインチ場	木造杉皮葺	2.3×2.75		水中解剖用
12 貯水桶				径5尺高さ6尺桶3本、捕鯨船運搬船への給水
13 貯水池		3.67×2.5		深さ7尺、機缶および缶詰製造用、沢水使用
14 貯水槽				機関室内5尺立方角形2個
15 塩蔵場	木造杉皮葺	7×11	77	鯨肉塩蔵用
16 倉庫	木造杉皮葺板囲い	4×11.5	46	製油その他用
17 倉庫	木造杉皮葺板囲い	2×5.5	11	一般需用品用
18 採油場	木造杉皮葺板囲い	3×7	21	製油平釜10面
19 採油場	木造杉皮葺板囲い	3.5×7	24	製油平釜7面、原図に番号なし
20 機缶室	木造杉皮葺板囲い	4×8	32	ウインチおよび缶詰製造用、原図に番号なし
21 缶詰製造場	木造杉皮葺	8×8.5	68	
22 製缶場	木造杉皮葺壁または板囲	4×10	40	図では28
23 倉庫	木造杉皮葺板囲い	3×5	15	缶詰材料および製品用
24 処理場	松丸太打込松板張	3.75×5		
25 運搬用レール		48		缶詰原料鯨肉運搬用
26 鍛冶工場	木造杉皮葺板囲い	2.5×4	10	捕鯨鉤の打直し他
27 貯炭場	杉板敷詰	5×7		100-300トン蓄積
28 事業船碇泊場				原図に番号なし
29 蒸釜	軟鋼製径3.5尺深4尺	2個		缶詰製造用
30 二重釜	軟鋼内部2.5部外部3部板	4枚		缶詰製造用
31 横置式陸用汽機		1台		缶詰製造用、原図では32

明治43年2-0149農商工「明治43年1月27日付け捕鯨根拠地設置許可願い」（宮城県公文書館蔵）より作成

リュースの写真は、複数の捕鯨会社の船を含むものだろう。

事業場長必携には税金や寄付金についても記録がある。県税の捕鯨税について、当初は背美鯨50円、長須野曾座頭が10円、その他の鯨5円で、1916（大正5）年頃に改正され、背美鯨50円、その他の鯨15円となり、1929（昭和14）年からその他の鯨が25円に改められた。さらに、この年度から「附加税は100分の100」という文字が現れ、1931年度は「捕鯨税及び船税、小船税の附加税は従来本税に対する100分の100を本年4月1日より



図7 おなじく根拠地設置許可願い添付の鮎川事業場付近図。宮城県公文書館蔵

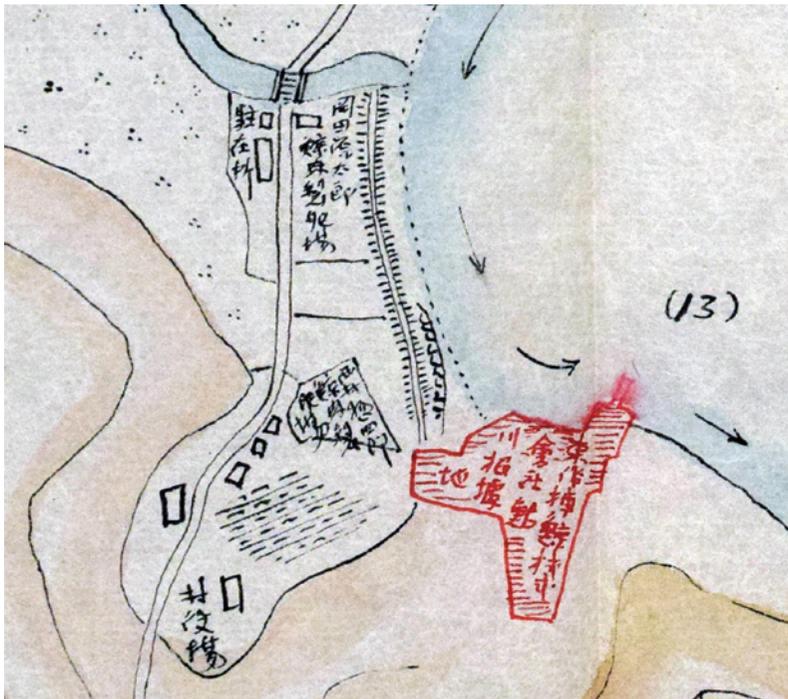


図8 肥料を製造していた岡田源太郎鯨肉製肥場や西村惣四郎鯨肉製肥場の名前が見える



図9 大日本水産が提出した根拠地周辺図。多くの捕鯨事業場が記されている。宮城県文書館蔵

表2 東洋捕鯨鮫川事業場の捕獲記録 1909-1944

年度	背美	白長須	長須	座頭	抹香	鯨	計	年度	背美	白長須	長須	座頭	抹香	鯨	計	
1909		3	65	7	4	50	129	1927		1	6	1	138	62	208	
1910		4	52	2	13	43	114	1928		1	9		85	26	121	
1911		9	35		20	52	116	1929		1	11	2	130	12	156	
1912		3	41	4	10	16	74	1930			12	3		146	17	178
1913			39	4	2	48	93	1931			1	4		22	17	44
1914		12	71	1	57	39	180	1932			2	5	1	11	21	40
1915		1	31	6	66	167	271	1933			2	7	2	22	32	65
1916		6	26	2	145	113	292	1934	1			4		24	5	34
1917			45	1	61	60	167	1935						43	20	63
1918			45		253	103	401	1936				8		47	108	163
1919			5	1	50	222	278	1937						17	51	68
1920		4	10		38	72	124	1938				8	2	66	77	153
1921		1	6	1	56	93	157	1939			1			66	44	111
1922			3		190	58	251	1940			3	4		136	57	200
1923		3	33	1	122	68	227	1941			7	26	2	194	132	361
1924		6	9	5	97	110	227	1942-1943年度は記録なし								
1925		14	18	3	159	70	264	1944	1			7		70	20	98
1926		8	11	1	89	180	289	合計	2	105	647	49	2,649	2,265	5,717	

「東洋捕鯨鮫川事業場長必携」より作製

表3. 東洋捕鯨鮎川事業場に在籍した捕鯨船 1914-1931 年度

捕鯨船名	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
第一東郷丸	1																	1
第五捕鯨丸	1	1																1
第一太平丸	1	1						1			1	1	1	1	1			
電丸	1	1	1				1			1		1	1	1	1	1	1	
アヴァロン丸	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1								
第三捕鯨丸	1				1		1				1	1						1
第一捕鯨丸		1		1	1	1	1			1				1				
第二太平丸			1		1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1
神功丸			1				1		1		1							
第二神功丸			1		1				1		1	1	1	1	1	1		
オルガ丸			1	1														
千島丸			1						1		1				1	1	1	1
第一博運丸				1	1	1	1	1	1	1	1	1						
アイランド丸				1	1	1	1						1	1				
天富丸				1	1			1					1					
第二博運丸					1	1		1		1	1	1	1	1		1	1	1
第二東郷丸					1	1				1								1
諏訪丸					1		1	1	1	1								
ギョルギー丸						1											1	1
第五東郷丸							1											
レックス丸								1	1	1	1							
六甲丸(巾着網)								1							1	1	1	1
漣丸									1	1	1	1	1		1	1	1	1
曙丸											1							
にこらい丸											1							
第三東洋丸												1	1	1	1			
第一元日丸																	1	1
在籍船数	6	5	7	6	12	8	10	9	9	9	12	9	9	9	8	8	8	9

東洋捕鯨鮎川事業場長必携より作製

100分の80に減額さる」、1935年度の捕鯨税は8割9分となったが1939年には本税の10割に戻っており、捕鯨税が附加分を合わせて当初の2倍になっていたことが伺える。一方、鮎川村への村税は、県税つまり捕鯨税の7割であった。ただし、1916-1917年は「10分の2」としている。船税や小船税、その他の税金として、宅地租、県と村への地租付加税と家屋税などが記されている。さらに1928（昭和13）年度には金庫税も見え、さまざまな税負担があったことが伺える。戦後、1947年の記述には電話加入県税とラジオ税、1949年ではりヤカー税と県民税が新たに現れている。

東洋捕鯨から地元への寄付金としては、1926（大正15）年以降の定例の寄付として、熊野神社、観音寺、鮎川区契約報奨金、臨時の寄付は1930（昭和5）年以降の記録で、鯨館建設費、塩釜海岸浚渫費、水難慰霊祭、鯨供養慰霊祭、塩釜港陸上臨港線布設、石巻警察署自動車購入費、巡查転任餞別、鮎川小学校運動会、鮎川在郷軍人会銃剣購入、鮎川村ガソリンポンプ、鮎川小学校剣道道具、鮎川警防団、戦死者海難者施餓鬼、大日本空協会

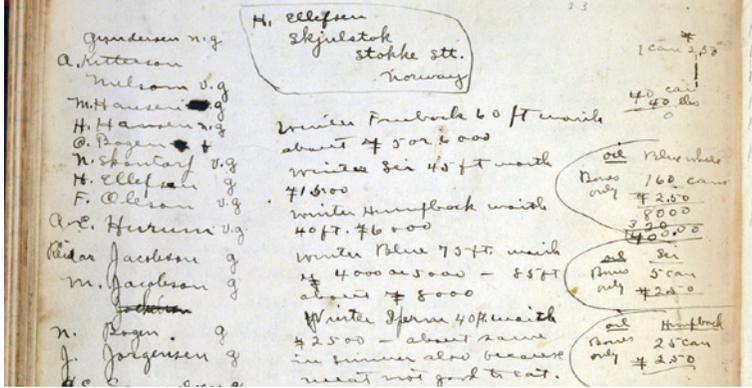


図 10 アンドリュースの調査日誌。最後のページはノルウェー人砲手の名前や連絡先、鯨の価格、事業夫の賃金などがメモされている。アメリカ自然史博物館蔵

表 4. 東洋捕鯨鮫川事業場に在籍した捕鯨船 (1918 年度)

捕鯨船名	加入	離脱	日数	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
千島丸	3/18	5/19	63											
第一博運丸	3/29	12/3	250											
第二博運丸	6/9	7/3	25											
天富丸 (1回目)	4/22	6/25	65											
天富丸 (2回目)	9/9	9/26	18											
アイランド丸	10/29	1/13	77											
第二東郷丸	5/13	9/2	113											
第一東郷丸	5/23	9/10	111											
第二神功丸	7/28	9/16	51											
第三捕鯨丸	9/13	10/8	26											
アヴァロン丸	9/17	11/20	65											
第二太平丸	10/28	1/13	78											
諏訪丸	10/27	11/21	26											
在籍船数				1	2	2	2	3	3	4	4	5	5	4
				3	4	4	5	5	4	3	4	4	4	4
				4	4	4	4	4	4	4	5	5	4	3
				3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
				3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

宮城支給基金などが見える。ここでは年代順に記したので、最後方は戦時体制の影響が強い。鮫川事業場長必携の寄付の項目は、他の事業場と比較して古い記録がなく、記述も簡素で、詳しい内容は得られない。

事業夫の人数は、1914-1925 (大正 3-14) 年度では 1 月平均 22-49 人、1 月分では 1,441 人と記されている。1925 年を見ると、最多月は 9 月で 60 人、最少は 3 月の 40 人、平均 49 人であった。常雇は 1914-1920 (大正 3-9) 年度で 4-13 人とあるが、1921 年以降は記載がない。

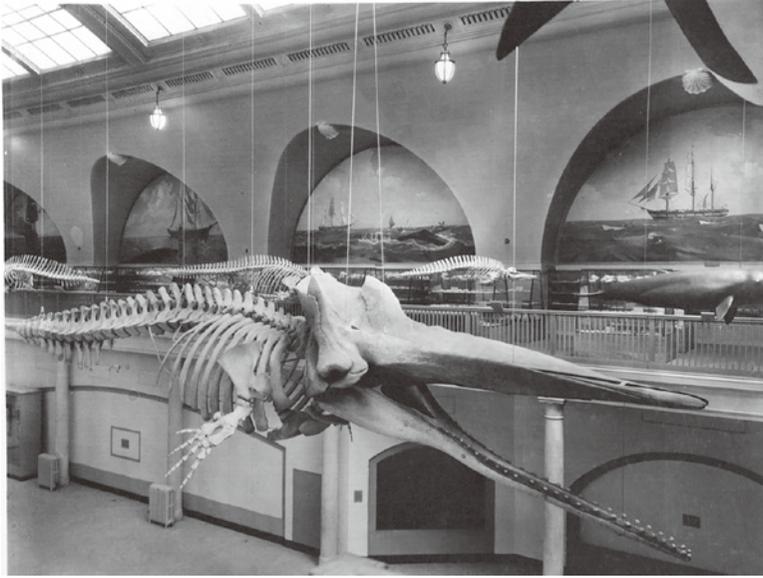


図11 アメリカ自然史博物館で展示されていた鮎川のマッコウクジラ全身骨格標本
Image #314191 American Museum of Natural History Library Image

鮎川の鯨類標本その後

さて、ニューヨークのアメリカ自然史博物館で常設展示されていた鮎川のマッコウクジラであるが、1960年代半ばに行われた展示更新で収蔵庫に戻されることになった。鮎川のマッコウクジラが吊り下げられていた海洋展示室では、背景画にアメリカ捕鯨の様子を描いていた。展示標本も捕鯨による捕獲個体が数多く、クジラを生物というより産物として印象付けるものであった（図11）。これが1960年代には時代にそぐわないと判断されたのである。その後数年してオープンした展示室の中心には、シロナガスクジラの実物大模型が据えられ、生物そのものを展示する内容に変更された。この展示方針は、現在に至るまで変わらない。このシロナガスクジラの実物大模型は、上野の国立科学博物館の屋外展示に見えるものの手本となったものである。

アメリカ自然史博物館の主要な展示は恐竜である。そこにはアンドリュースの物語りが誇らしげに掲げられている。一方、彼が日本の捕鯨産業の協力を得て収集した鯨類標本は展示からはすべて取り去られている。これは捕鯨に対する自然史博物館の姿勢を示すとともに、捕鯨を取り巻く今日の言説から博物館のヒーローを守るためかも知れない。もちろん科学者は彼の研究成果に対して正当な評価を与えており、鮎川での調査の価値はゆるぎない。それに1930-1960年代、ニューヨークの市民は、知らずのうちに鮎川の標本でクジラのイメージを得ていたのであり、その教育に果たした効果は相当のものだったといえる。アメリカ自然史博物館の鯨類標本は、アンドリュースが収集したものがほとんどすべてで

ある。つまり、彼の鮎川での調査活動が博物館の鯨類コレクションの主要部分をなしているのである。アンドリュースの鯨類研究を積極的に評価し、その価値を見出すことができるのは、むしろ日本人たちかも知れない。

謝 辞

本論を記すにあたり次の機関や人物にお世話になりました。アメリカ自然史博物館研究図書館、アメリカ自然史博物館哺乳類研究部、日本水産株式会社、宮城県公文書館。調査にあたっては、JSPS 科学研究費補助金「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」（基盤研究 C：2011-2013、課題番号 23501209）および「明治大正期に遡る一次資料「事業場長必携」を用いた東洋捕鯨の操業復元」（基盤研究 C：2014-2016、課題番号 26350365）の補助を受けました。

参 考 文 献

- 天野雅男. 2008. 形態変異 — イシイルカ. 加藤秀弘編. 日本の哺乳類学 3 水生哺乳類, pp. 101-122. 東京大学出版会, 東京.
- 宇仁義和. 2015. ロイ・チャップマン・アンドリュースが撮影した 1910 年の土佐清水. 高知県立歴史民俗資料館研究紀要, 19: 1-17.
- 宇仁義和. 2015. ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査と下関 — 東洋捕鯨の蔚山事業場における捕鯨事業を中心として. 下関鯨類研究室報告, 3: 15-27.
- 宇仁義和. 2016. 社内文書に見る東洋捕鯨の事業場. 下関鯨類研究室報告, 4: 12-35.
- 宇仁義和・当山昌直・岸本弘人. 2014. R.C. アンドリュースが 1910 年に撮影した那覇の写真. 沖縄史料編集紀要, 37: 69-84.
- 宇仁義和・ロバート＝ブラウネル・櫻井敬人. 2014. ロイ・チャップマン・アンドリュースの日本と朝鮮での鯨類調査と 1909-1910 年の日本周辺での行程. 日本セトロジー研究, 24: 33-61.
- Andrews, R.C. 1911. A new porpoise from Japan. *Bulletin American Museum of Natural History*, 30: 31-51+plates.
- Andrews, R.C. 1911. Shore Whaling: A World Industry. *The National Geographic Magazine*, 22(5): 411-442.
- Andrews, R.C. 1916. Monographs of the Pacific Cetacea. II. The sei whale (*Balaenoptera borealis* Lesson). *Memoirs of the American Museum of Natural History*, New series, 1(6): 289-388+plates.
- Andrews, R.C. 1916. *Whale Hunting with Gun and Camera*. D. Appleton, New York, 322pp.

写真引き
100年前の鮎川のすがた

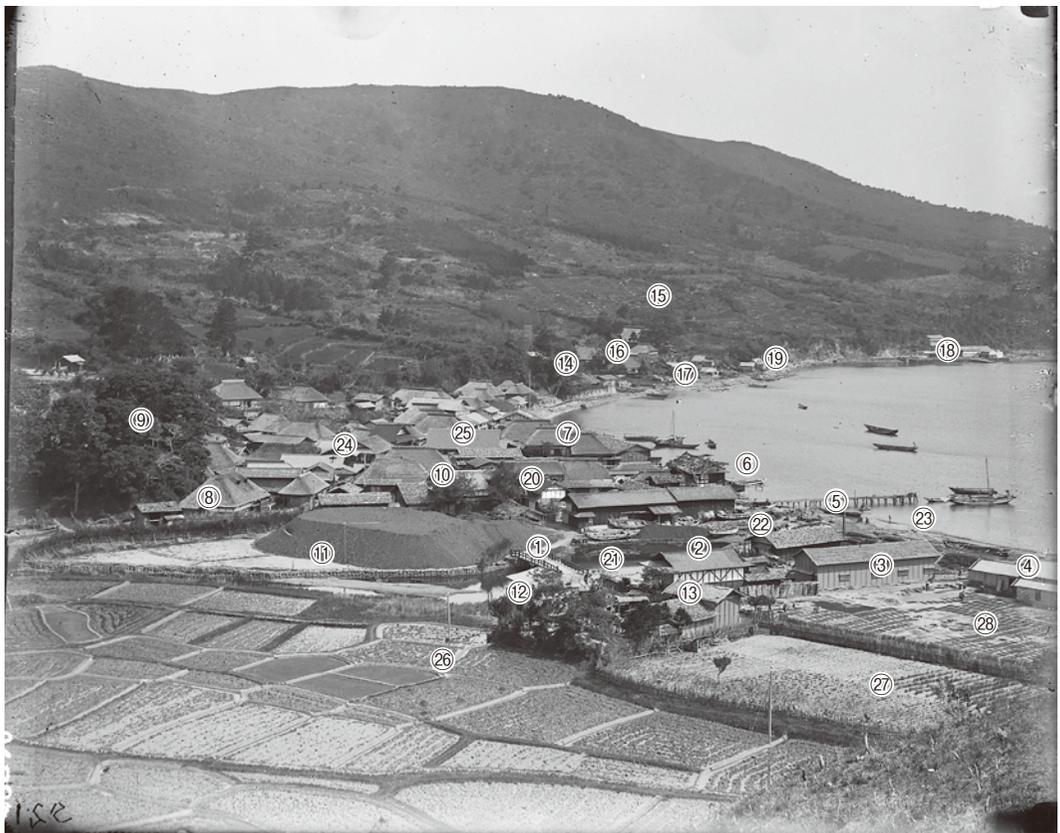
加藤 幸治・宇仁 義和・成澤 正博
小野 世椰・加藤和佳香・小泉 友美・佐藤 志穂・高橋瑠美奈・吉田 真子

● 26838/1910.6/ヤマノカミサマ前の板碑と女性たち



- ①この場所は、鮎川のケンジ墓と呼ばれる土葬墓の麓にあたる。木陰に見えている建物は、この場所にあったヤマノカミサマ。
- ②板碑には「秋葉山」と彫られている。東日本大震災の津波で八・六メートルの津波が直撃した場所であるが、板碑は瓦礫からより分けられ、現在もこの場所に横たえられている。
- ③三人の女性。身綺麗な和装やその立ち居振る舞いから、地元の女性ではないと思われる。アメリカ自然史博物館のキャプションにも「Three Geishas」とある。アンドリュースは、吉原など色町に足しげく通ったことを考えると、仙台や塩釜の花街から同伴してきた女性たちとも考えられる。
- ④洋犬を連れている。猟犬のポインターか。
- ⑤こうもり傘の日傘。影や光の様子から照り返しが強い晴天であることがわかる。別の二人もよく見ると手に閉じたこうもり傘を携えている。
- ⑥木製の柵、入り口に縄のようなものが掛かっているの見える。この柵を記憶している人は少なく、昭和八年の昭和三陸津波で流失したか。
- ⑦砂利道。これが鮎川のメインストリートになる。女性が立っている位置から、路面は少し高い。
- ⑧スギの木。蔭がからみ、当時は鬱そうとした雰囲気であったことがうかがわれる。

● 26827/1910.6/鮎川風景



- ①鮎川の西町地区と南地区の間に架かる鮎川橋。
- ②明治37年頃開院の伊吹医院。
- ③屋号：橋本の長屋。
- ④肥料工場。
- ⑤山西棧橋。
- ⑥建築が見事な泉屋旅館とマツの木。
- ⑦屋号：セイダヤの自宅と隣接する鰹節工場。
- ⑧屋号：ハズレの自宅。
- ⑨西の坂。
- ⑩屋号：カクトの自宅。
- ⑪屋号：丸良の屋敷があった場所だが、この写真では更地に土か石炭か何かを台形に積み上げている。相当な量で見事なものだが、どこから運んだものかは不明。隣の川から荷揚げしたか。
- ⑫明治22年開設の鮎川駐在所。
- ⑬屋号：島屋の自宅。
- ⑭現在の石巻市牡鹿稲井商工会事務所あたり。この山を切り崩し、その土で浜丁や南地区の埋め立て工事が行われた。
- ⑮屋号：オジョヤ（御庄屋）の自宅。
- ⑯屋号：ヤナギダの自宅か。
- ⑰屋号：鈴吉の自宅か。
- ⑱紀伊水産株式会社の事業場。
- ⑲モウカザメの加工場。
- ⑳店の看板が見える。
- ㉑川の幅が現在の二倍はあるだろう。
- ㉒魚を入れる大きな生簀（ド）が並んでいる。その前の山なりになっているものは石炭か
- ㉓浜で作業をしている漁夫のような人物が見える。
- ㉔粟野宅、郵便局もしていた。
- ㉕屋号：橋本、和泉恒太郎村長の自宅。
- ㉖水田、電柱が何本か立っている。
- ㉗畑、大豆を植えているか。
- ㉘干場、鯨肥を天日干ししている。

● 26839/1910.6/鮎川風景と東洋捕鯨株式会社事業場の全景



- ①明治43年6月の鮎川の風景である。撮影場所は、鮎川の小高い丘陵上に位置するケンジ墓と呼ばれる土葬墓から、少し海側に下ったあたりである。現在は木が生い茂っており、これと同じ風景は撮影できない。
- ②笹の藪や灌木の丘陵となっている。この場所は明治以降、国有林となっているが木が伐採されていることがわかる。下に見える東洋捕鯨株式会社の建造物群のための木材を、現地調達するために伐採したとも考えられる。
- ③東洋捕鯨株式会社のクジラを解剖するために引き上げる設備。二本の柱のようなものは、ボックスと呼ばれるクジラを吊り下げて解剖するための滑車と柱。
- ④長い屋根の建物は、解剖したものを小分けしたりトロッコで運んだりする鯨肉処理場で、鮎川ではサイカツバ（裁割場）と呼ばれていた。屋根で隠れて見えないが、平行して鯨体引揚解剖場である板張りのスリップウェイがある。
- ⑤屋根に一本煙突がある建物は、ウインチと機関室。蒸気機関を動力に二機のウインチでクジラを引き揚げるのは、当時としては世界でも最新鋭の設備であった。
- ⑥四本の煙突のある建物は、鯨油の製油工場と油置き場で屋根は杉皮葺きである。写真では確認できないが、この場所に鯨骨を保管するコツバ（骨場）がある。ちなみに、明治四一年、軍に納入するために鮎川に日本初のクジラの大和煮缶詰が作られた。このあたりの建物群のどれかでそうした作業も行われていた。
- ⑦端正な寄棟造りの建物。東洋捕鯨株式会社の事務所か宿舍だと思われる。この場所は、後に日本水産鮎川事業場（さらに日本捕鯨事業場へ）となるが、この場所は従業員宿舍と炊事場、事務所などとなる。
- ⑧このあたりを清崎と呼び、現在は運動公園や復興公営住宅等がある。当時は製油工場の煙と匂いが充満していただろう。
- ⑨ドイツ製蒸気船ミハイル号。当時は、このような母船クラス的大型船を鮎川港に繋留することはできず、船で行き来しなければならなかった。上級乗組員のための応接室などを、東洋捕鯨株式会社が賓客の接待などに用いたと言われている。
- ⑩貯炭場。海岸が砂浜でなく、柵を巡らせているので埋め立て地であろう。洗濯物を干すような動作の人物も見える。
- ⑪大きな樽が横たえてある。後の日本水産鮎川事業場時代には、この場所が塩蔵工場となっており、大屋根の建物はそれに類する工場であろう。
- ⑫田畑。季節が六月であることを考えると麦畑か。
- ⑬肥料工場の小林工場の建物と思われる。広場の手前側に井戸が見える。
- ⑭肥料工場の亀田利助工場の建物と思われる。脇には鯨骨が野晒しに置いてある。
- ⑮棧橋。肥料の積出し用か。
- ⑯線路。棧橋まで延びており、トロッコでものを運ぶためのものであろう。
- ⑰休耕田か。このあたりはもともと湿地であり、現在でも水はけがあまり良くない。
- ⑱集落。あるいは従業員宿舍や社宅か。
- ⑲いわゆる伝馬船、鮎川ではこうした小型船をワセンッコ（和船こ）と呼ぶ。
- ⑳運搬船が湾内に錨を下ろしている。
- ㉑現在では埋め立ててわからないが、かつて鮎川の湾内は砂浜であり、船を引き揚げておくことができた。
- ㉒黒崎。湾の縁にあたり磯が広がっている。磯ものや根魚が採れる。
- ㉓網地島の鳥影がうっすら見えている。
- ㉔写真27363の鯨骨ゲートの頂点の飾りが見えている。
- ㉕写真27186でアンドリュースがイルカの計測作業を行っている建物。

● 27353/1910.6/鮎川の風景



- ①写真 26839 と同様、鮎川のケンジ墓（埋葬墓）から少し下ったところから撮影されたが、まったく同じ位置からではなく、少し東側の斜面に移動して撮影していると思われる。
- ②黒崎の磯が見える。かなり潮はひいた状態のようだ。
- ③紀伊水産株式会社の事業場。
- ④運搬船が多く停泊している。
- ⑤二本マストの中型船、運搬船と思われる。
- ⑥畑。植えているのは大豆か。
- ⑦風除けの垣。この垣に沿って道が延びている。
- ⑧畑の垣から続く道。
- ⑨厠。その前に人の姿が見える。
- ⑩洗濯物を干している。この日は晴天であったと想像できる。肥料工場との間にも垣が巡らされている。
- ⑪萱葺き民家。
- ⑫肥料工場、松田工場と思われる。経営者は石巻の人。
- ⑬肥料工場、伊佐奈商会の工場。東洋捕鯨の事業場にはたいてい伊佐奈商会の工場が作られた。
- ⑭同じく伊佐奈商会の工場。
- ⑮鯨肥のカンバ（干場）。当時は、備後豊表の藺草の肥料や、サツマイモ畑、桑畑の肥料として重宝され、鯨肥は全国に出荷されていた。
- ⑯大量の薪が積み上げられている。
- ⑰用途不明の穴あき丸太が積み上げられている。小割して薪にするために運んできたものか。この場所は手前の樽のある場所よりも高い。この堤防が海岸線と平行に延びている。
- ⑱肥料会社の栈橋。潮がかなりひいているように見える。
- ⑲巨大な樽が集められている。人物の姿も見える。
- ⑳建物の近くで作業をする人と、建物の壁に背をもたれて休憩する男たちが見える。
- ㉑網地島の鳥影の端が見えている。
- ㉒遠くに蒸気船が煙を上げて進んでいる。
- ㉓朽ちた櫓のようなところに鳥がとまっている。鮎川では肥料工場の周りに数え切れないほどのカラスがいたことを人々は思い出すが、この写真からはあまりそうした姿は見えない。
- ㉔帆をあげた和船。漁船と思われる。
- ㉕山西栈橋

● 26855/1910.6/クジラの引き揚げ前の渡鯨作業



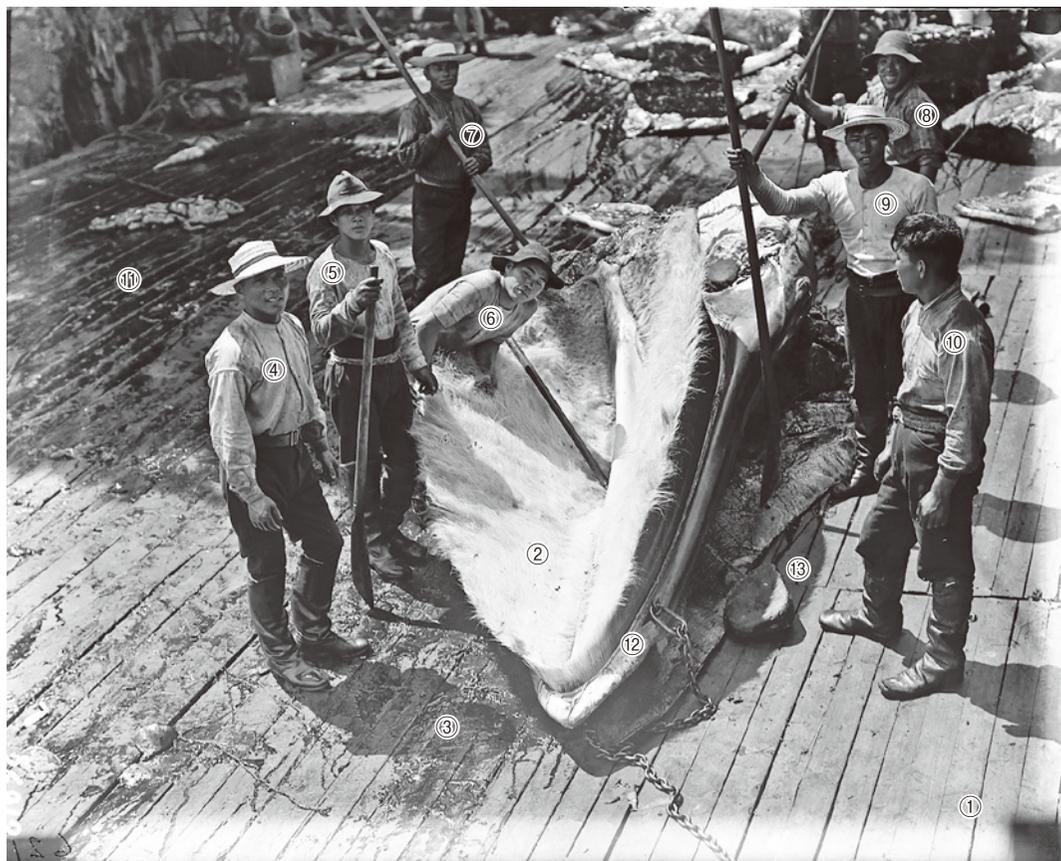
- ① シロナガスクジラ。クジラを捕獲してきた右側の捕鯨船につないでいたクジラを解き、左側の伝馬船の人物らがワイヤーをかけている様子。
- ② 第三捕鯨丸。
- ③ 錨を下ろしていない。船の両側にひとつずつ見える。
- ④ 捕鯨砲。先についた銚は画面奥を向いており、砲手の持つ取っ手側が見えている。横の人物が持っている丸い金属板は、銚がつながったロープを巻いて置いておく台で跳ね上げ式になっていることがわかる。
- ⑤ 二人の男たちが、奥の洋船につないだロープを持って作業をしている。船を固定しているのだろうか。
- ⑥ 運搬船と思われる。艫（とも）の部分が楕円に縁取られた特徴ある形状である。このような洋船は当時から石巻の造船所で製造されていたといい、国産の洋船であるかもしれない。
- ⑦ ドンザと呼ばれる労働着を着た漁夫が、ロープを持って支えている。帆柱のあたりにもひとり人物が見える。
- ⑧ こうした小型の手漕ぎ船を伝馬船とよび、特に鮎川ではワセンッコ（和船こ）と呼ぶ。
- ⑨ 当時この場所に事業場を構えていた紀伊水産株式会社の建物。煙突も見える。
- ⑩ 鮎川浜の湾の東側の岬を黒崎と呼ぶ。反対側の東洋捕鯨株式会社の事業場側の岬を清崎と呼ぶ。
- ⑪ 開墾された畑。
- ⑫ 薪や柴をとる雑木林。昭和中期には、山頂近くまで畑として開拓されるが、現在は再び森林となっている。

● 26856/1910.6/シロナガスクジラの解剖と見物人



- ①スリップウェイの奥から撮った写真。目線が高いことから、画面右の崖側のどこかに上がってカメラを構えている。
- ②スリップウェイ。クジラを引き上げるウインチのワイヤーが伸びている。
- ③クジラを水際で、各々オオボウチョウを手にとって、七人がかりで解剖している。頭部を海側に向けて解剖するのは、尾びれにワイヤーを巻きつけて引き揚げやすいためか。
- ④剥ぎ取った肉や皮を画面左下の方に動かして、裁割している。ボウカギ（棒鉤）や小型の鉤であるノンコを手で切り分けられたものを整理している。
- ⑤伝馬船であるワセンッコ（和船こ）に乗って、クジラに巻きつけた縄を曳いている。鯨体が沈まないように支えているのか。
- ⑥見物人がスリップウェイの上にも集まっている。手ぬぐいをほっかむりした人も見える。和装に下駄か草履。二人の子どもの姿も見える。
- ⑦石炭を燃やす松明。
- ⑧石炭を入れたカマス。
- ⑨クジラの皮が寄せられている。
- ⑩おじいさんの膝の上に座る男の子。
- ⑪栈橋の屋根は杉皮葺き。
- ⑫白い前掛けをした男性二人。料理人か魚屋だろうか。右側の男性は口に手ぬぐいをあてており、相当なおいが充滿していることがうかがわれる。
- ⑬子どもはいつでも一番見物しやすい特等席で見ている。
- ⑭見物人は八〇人あまりいるようだが、この時期の鮎川ではまだクジラを食べる習慣がそれほど根付いていなかったという。単にクジラの解剖を見物に来たのであろうか。
- ⑮運搬船。
- ⑯紀伊水産株式会社の事業場。
- ⑰こんもりと見える大木のある場所が、屋号：オジョヤ（御庄屋）
- ⑱鮎川の南地区の集落が見えている。
- ⑲当時、テンノウサマ（天王様）と呼ばれた祠のあった場所。カッパの神様といわれた。現在の鮎川・熊野神社。

● 26912/1910.6/解剖する男たち



- ① 鯨肉処理場の松明のあたりから撮影した写真。
- ② イワシクジラのおご部分内部が見えている。
- ③ スリップウェイの上に血糊がベッタリと流れて、陽の光に反射している。人物の影の具合からまだ日が高い時間帯に撮影した写真であることがわかる。
- ④ 麦藁帽子を被って微笑む男性。アンドリュースと気心が通じていることをうかがわせる表情である。
- ⑤ 短めの柄のオオボウチョウ（大包丁）を携えたハットを被った男性。シャツは血で赤く染まっている。
- ⑥ クジラのヒゲにもたれて顔をのぞかせている、ハットを被ったおちゃめな男性。
- ⑦ 長い柄のオオボウチョウを携えた麦藁帽子の男性。皮や肉を裁割しているのだろう。
- ⑧ ハットを被ってオオボウチョウを持った男性。向かいの男性とともに皮や肉を裁割しているのだろう。満面の笑みを浮かべている。
- ⑨ 麦藁帽子の白シャツの男性。長柄のオオボウチョウを持っている。写真 27363 で鯨骨ゲートの左側に立っていた男性。
- ⑩ 写真 27363 で鯨骨ゲートの右側に立っていたイケメンの男性。
- ⑪ 松の木の木陰となっている。
- ⑫ 引き揚げるために顎の骨に鎖のようなものを打ち込み、鎖をつないでいる。
- ⑬ 木製の滑車。

● 27026/1910.6/イワシクジラの渡鯨作業



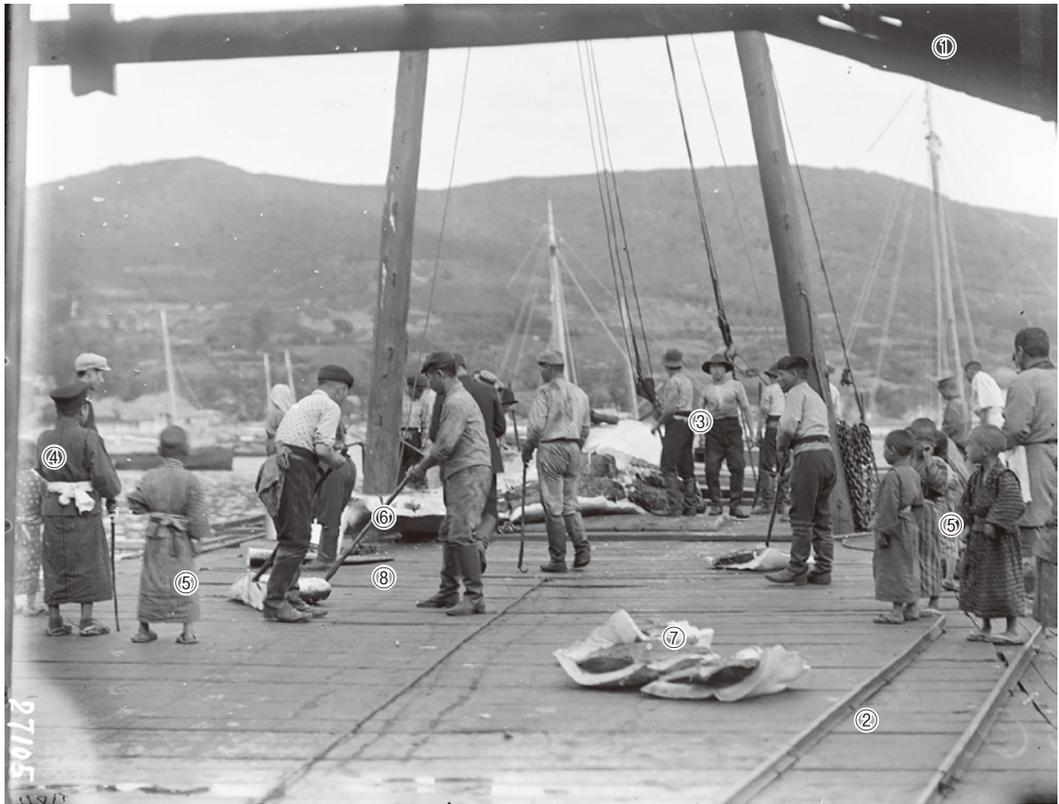
- ①船上から撮影した写真と思われる。
- ②第三捕鯨丸。キャッチャーボートと呼ばれる捕鯨船は、当時はノルウェーからの輸入であった。一〇〇トン～一五〇トン規模がほとんどであった。
- ③脇に繋いで運んできたクジラを解いて解剖作業に受渡そうとしている。
- ④右側の男性はキャップを、左側の男性は麦藁帽子を被って作業をしている。
- ⑤捕鯨鉞。先端がとがった尖頭鉞である。後に先端が平らな平頭鉞に変わるが、これはとがっていると水面で鉞が飛び跳ねてしまい、クジラに強く命中しにくいいため、水中に潜ってもまっすぐ進む平頭鉞が開発された。本写真はごく初期の捕鯨鉞の姿を伝えている。
- ⑥跳ね上げ式の鉄板の上に鉞につないだロープを巻いておいておく。
- ⑦救命ボート。
- ⑧蒸気船の煙突に東洋捕鯨株式会社のマークが見える。
- ⑨捕鯨砲のトリガーを支える持ち手がまっすぐな棒状となっている。後には志野徳助考案の日本人砲手の身長に適した、くの字状に曲がったハンドルで方向を微調整しやすく改良される。

● 27096/1910.6/日本初のスリップウェイでのクジラの解剖



- ①ボックスのあたりから鯨体引揚解剖場である板張りのスリップウェイの方向を写している。
- ②石炭を燃やす竈を固定した松明。鉄の棒を木の杭に二ヶ所縄で結んであり、おそらく松明は海側にも回転させて照らすことができると思われる。
- ③石炭を入れた麻袋のカマス。
- ④解剖しているのはナガスクジラ。
- ⑤スリップウェイの血や油を流すためにポンプアップされた水が流れている。
- ⑥サイカツバ（裁割場）の建物。杉皮葺き。
- ⑦屋根の影になっているが、トロッコが写っている。子どもが何人かこれを押すなどして遊んでいる姿が見える。
- ⑧スリップウェイはスロープ状に木の板を張っている。
- ⑨スリップウェイの延長線上の海中の部分には、石積みのスロープが敷かれていた。
- ⑩松明。
- ⑪イワシクジラの上に乗って作業をする事業員。
- ⑫見学している子どもの姿が見える。
- ⑬ウインチの蒸気機関室の煙突から水蒸気が出ている。
- ⑭隣の工場から煙がたなびいている。
- ⑮トロッコの線路は奥の杉皮葺き屋根の建物の前にまで延びている。
- ⑯煙突のある製油工場は杉皮葺きではなく、トタン屋根のように見える。板金屋根だとすれば、当時としては最新の建材である。
- ⑰ワセンッコと呼ぶ伝馬船。
- ⑱クジラの皮か。

● 27105/1910.6/棧橋でのクジラの解剖



- ①サイカツバ（裁割場）と鮎川で呼ばれていた鯨肉処理場の建物内から湾内を向いて撮った写真。梁が写り込んでいる。
- ②線路。肉や皮をトロッコで運ぶための線路。サイカツバの中へ通じている。作業は蒸気ウインチ（二本のダブル式）で吊り下げた鯨体を事業員が大きく肉や皮を切り取り、それを棧橋の上で裁割して鯨肉小切り場経由で塩蔵場にトロッコで運ぶという工程であった。
- ③クジラの解剖をする作業員を、鮎川ではジギョウイン（事業員）と呼ぶ。長ズボンに長草靴のスタイルが定番で、多くは山口県や長崎県から事業場の進出に伴って鮎川に来た男たち。
- ④学童。学帽を被り、着物に草鞋の姿。
- ⑤子ども。頭は坊主頭で、着物に藁草履を履いている。鼻くそをはじる子どももいる。
- ⑥棒の先端に鉤のついた道具は、鮎川ではボウカギ（棒鉤）と呼ばれており、現在もほぼ同じ道具が解剖の際の肉などの移動に用いられる。手のひらサイズの鉤はノンコとよぶ。
- ⑦皮を剥いている途中の大きな肉塊が見える。
- ⑧尾びれのような部位。

● 27162/1910.6/クジラを引き揚げて解剖



- ①ボックと呼ぶクジラの引き揚げ具。クジラの尾びれに固定した鎖を、滑車を通したウインチで引き揚げている。ワイヤーはウインチで巻き取られ、人がこれを曳いているのではない。作業空間は海に突き出したかたちで、幅三間 (5.4 m)×長さ三〇間 (54 m) (およそ一八〇畳) の広さがあり、引き上げ具であるボックは高さ二〇尺 (6.6 m) であった。
- ②運搬船。写真 26853 に写っていたものと思われる。
- ③④松明。石炭と思われる燃料が金属製の籠に入っている。クジラ漁を夜に行うことはないが、解剖や作業は日暮れになることもあったであろう。
- ⑤クジラの筋や内臓の残骸が浮いている。昭和中期ごろまでは、鮎川の湾内にはクジラの内臓や血が浮いているのが常だったという。子どもたちは平気で水泳などしていたというから驚きである。
- ⑥栈橋に引っかかっているのはクジラの皮か。
- ⑦作業をする人に混じって見物人と思しき姿も見える。
- ⑧セイダヤという屋号の家。
- ⑨明治中期に作られた石積み の堤防。
- ⑩和泉屋旅館。屋根はスレート葺きで木造二階建ての当時としては豪華なつくりだった。
- ⑪鮎川小学校だと思われる。小学校は明治前期は東洋捕鯨株式会社の場所にあり、同社が鮎川に進出したときにこの場所を切り開いて小学校を建造したといわれる。この場所から後に小学校は現在の位置に移転し、跡地に昭和三陸津波の震嘯災記念館および鯨館 (町立鯨博物館の前身) が建設された。昭和に入り、牡鹿町立国民健康保険病院および健康保険センターになり、現在は鮎川集会所となっている。
- ⑫萱葺きの大屋根の民家は、屋号ハズレという家。

● 27186/1910.6/調査をするアンドリュース



- ①ロイ・チャップマン・アンドリュース本人。アンドリュースお気に入りのハットを被り、長袖シャツの袖をひじまで捲り上げ、長ズボンに革靴という服装である。アンドリュースは誰かにカメラを渡し、自分はポーズを取ってこの写真を取らせている。撮影者不明。
- ②カマイルカ。アンドリュースは、太平洋のイルカ類の調査研究を精力的に行っていた。当時の鮫川は、鯨油と肥料をとるための捕鯨が中心であり、その一環でイルカをとることはなかったのではないかと。東洋捕鯨株式会社に依頼して調査のために捕獲してもらったサンプルなのではないか。
- ③たまたま居合わせて写り込んだ男性。素肌に半纏を着て藁縄を帯にしている。襟には「伊佐奈商會」とあり、長靴を履いていることから、東洋捕鯨株式会社と関連の深い鯨肥会社である伊佐奈商會に所属する人物であることがわかる。
- ④木の台。有り合わせのものを用いたか、調査用に作らせたかはわからないが、台はイルカと同じ大きさである。
- ⑤台の上には広げられたフィールド・ノートと、巻尺が置かれている。
- ⑥アンドリュースは、右手に鉛筆を持ちながら、両手でイルカの頭部を巻尺で計測している。右手の手元には小さな帳面も置かれている。
- ⑦杉皮葺きにガラス窓をつけた小屋。壁は横向きの板張りとしている。
- ⑧写真 27363 に写っている鯨骨ゲートの頂点にある鳥の飾りのようなものが見えている。
- ⑨製油工場の四本の煙突が見えている。鯨骨ゲートの位置、前後に撮られた写真からこの場所は、写真 26839 の説明 25 番で示した建物の、海側の壁沿いであることがわかる。
- ⑩引き戸型の窓。
- ⑪中から女性が顔をのぞかせて、アンドリュースの作業、あるいは写真撮影の様子を見つめている。女性が作業をする窓付きの小さな建物であることから、炊事場であろうか。
- ⑫遠くを見つめる女性。和装に前掛けをして下駄を履いている。この写真の次のカットにも同じポーズで写っており、たいへん不自然な様子であることから、アンドリュースが意識的に写し込むために、そこに立ってもらったのだろうか。
- ⑬地面に杭が打ち込んである。用途は不明。
- ⑭アンドリュースが腰掛けている木箱は、スリッパウエイあたりにも散在する。

● 27206/1910.6/胸びれを持つ男たち



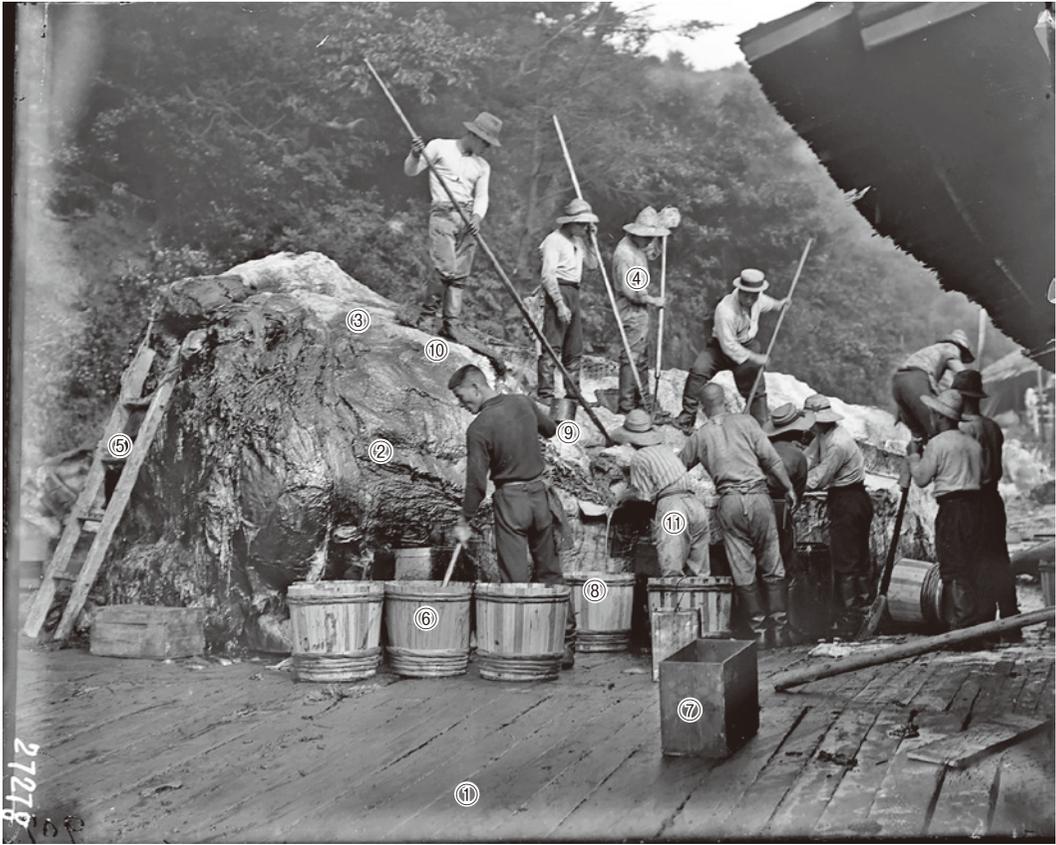
- ①スリップウェイ上で撮った写真。
- ②ザトウクジラの胸びれ。先端にフジツボがついており、右端には関節の丸い骨が見えている。
- ③三人がかりで支えなければならない重さである。
- ④ポーズを決めている男性。よれたハットに血で染まったシャツを着ている。
- ⑤半袖シャツにハットを被った男性。
- ⑥変わった形の帽子には、東洋捕鯨株式会社 シンボルマークである「一・〇」のイチマル・マークが見える。
- ⑦カンカン帽の男性
- ⑧ハンチング帽の強面の男性。
- ⑨麦藁帽子のにこやかな男性。

● 27275/1910.6/事業場幹部の人々とマッコウクジラ



- ① 捕獲されたマッコウクジラ。アンドリュースが標本として持ち帰り、アメリカ自然史博物館に収蔵された。一九三〇～六〇年代に常設展示室に吊るされていた。
- ② 東洋捕鯨株式会社は、明治三九年に当時の宮城県知事と政府の水産局長の要請により、同社の社員が鮫川の向田地区を調査し、捕鯨根拠地として適していると判断され建設に着手された。当時は漁民の反対があったものの、村側と浜の古老らの説得によって了承されたという。
- ③ スリップウェイにウインチでクジラを引き揚げるための鎖と滑車。
- ④ スリップウェイ上には解剖されたクジラの部位が散乱しており、季節が六月であることを考えると、たいへんな匂いであったであろう。
- ⑤ クジラの部位と思われる。
- ⑥ 脳油を採取するための桶。
- ⑦ 対岸の紀伊水産株式会社の事業場が見える。
- ⑧ カンカン帽をかぶってオオボウチョウ（大包丁）を持つ男性。解剖長であろうか。
- ⑨ ハンティング帽を被った紳士的なたゞまの男性。この男性のみが写った別の写真の、アメリカ自然史博物館のキャプションには「Ito. Master」とあり、東洋捕鯨株式会社の伊藤場長であるとわかる。
- ⑩ 長靴を履いていることから、東洋捕鯨株式会社の幹部と思われる。
- ⑪ 特徴的なネクタイを締め、ジャケットを着た男性。
- ⑫ ハンティング帽に作業着姿の男性。
- ⑬ ハンティング帽を被っているものの、ひとりだけ和装に雪駄か草履という格好の男性。成澤正博氏の祖父と思われる。
- ⑭ 詰襟に革靴、ハンティング帽という身なりの男性。
- ⑮ スリップウェイに覆い被さるように延びた松の木。斜めの構図を意識してアンドリュースが写しこんだものか。
- ⑯ 歯が非常に磨り減っていることから、年齢の高い個体であることがわかる。全身骨格の標本がアメリカ自然史博物館に現在も保管されている。

● 27278/1910.6/脳油を採取する男たち



- ① マッコウクジラの脳油採取の作業を、スリップウェイ上で撮った写真。
- ② 頭部を解体し、脳油と呼ばれる油を採取している。
- ③ 丸剥き法と呼ばれる解剖法だという。
- ④ 四人の男性が鯨体の上に乗って、オオボウチョウ（大包丁）で解剖している。
- ⑤ 鯨体の上るためのはしご。
- ⑥ 脳油を入れる中型の桶。
- ⑦ 木箱が無造作に置いてある。
- ⑧ 鯨体から脳油が流れ落ちているのがわかる。手元を拡大すると、油まみれの手が見える。
- ⑨ 柄杓。
- ⑩ 滑らないように藁を敷いた上に立っている。
- ⑪ ズボンでなく山袴を穿いている人物。

● 27359/1910.6/アイランド丸ほか



- ① 捕鯨船が何隻も停泊している様子を、別の船上から撮影した写真と思われる。
- ② 手前にあるのは、内外水産株式会社の捕鯨船アイランド丸。捕鯨船は、港へ戻って捕獲したクジラを受け渡してしまえば、あまり忙しくないという。船の整備や掃除、飲料水や石炭の積み込みなどの仕事があり、この写真でものんびりした様子がうかがわれる。
- ③ おそらく機関室の換気窓と思われるものが全開となっている。
- ④ 救命ボート。
- ⑤ 布製の三角帆。
- ⑥ 作業をしている男たち。甲板員（こうはんいん）という。
- ⑦ 奥にチラリと見えているのは東洋捕鯨株式会社の第一捕鯨丸と思われる。
- ⑧ こちらの捕鯨船は、船名はわからないものの、アイランド丸と同じマークが煙突にしるされている。

● 27362/1910.6/アイランド丸外観



- ①船上から撮影した写真と思われる。
- ②アイランド丸は撮影時では内外水産株式会社の所有する捕鯨船（キャッチャー・ボート）。
- ③トップと呼ばれるクジラを目視で探す場所。クジラを探すのは探鯨員またはボースンと呼ばれた。クジラを見つけると砲手や操舵室に、ホースピー（whole speed…か?）=全速前進などと指示を出した。
- ④捕鯨鉾。近くに長靴が干してあるのが見える。
- ⑤ブリッジと呼ぶ操舵室。先端に見えるのは羅針盤。
- ⑥救命ボートが下ろされている。この規模の捕鯨船を停泊させる港が整備されていないため、船との行き来は伝馬船などを使用したと思われるが、救命ボートもそうした役割に使ったか。
- ⑦機関室のなかに人影が見える。
- ⑧煙突には内外水産株式会社のものと思われるマークが見える。よく見ると煙突から煙が出ている。
- ⑨これは地元では珍しいことであるが、日本髪を結った女性が二人、捕鯨船に乗り込んでいる。見物のために載せたのか。アンドリュースが鮎川に同伴させてきた、写真 26838 の女性たちと思われる。
- ⑩丘陵部は畑として開墾されているのがわかる。
- ⑪機関室の窓が開いている。煙突の煙から、機関が動いているので、換気と明かり取りのために開けているのだろうか。

● 27363/1910.6/鯨骨ゲート



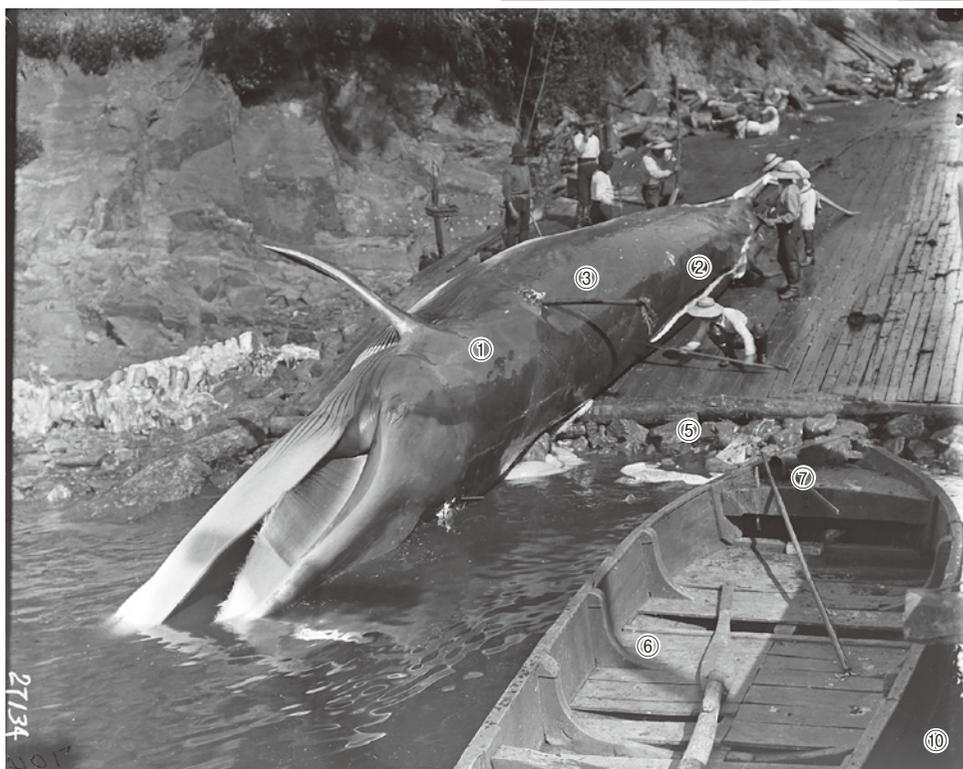
- ① 東洋捕鯨株式会社の敷地内にあった鯨骨のゲート。上の部分に浮き彫りされている「一・〇」のイチマル・マークは、東洋捕鯨株式会社のシンボルマーク。イチマルの呼び名は、日本遠洋漁業株式会社以来のもので、社名を変更しても愛称として使い続けられた。天辺には鳥の作りもののような飾りがやはり鯨骨で作られている。
- ② ゲートの左側には桜の花のようなマークがおそらく墨で描かれている。
- ③ 皮製のロングブーツに長ズボンを藁紐で結び、シャツを着た屈強そうな男性。かなりのイケメンである。
- ④ 麦藁で作ったいわゆるカンカン帽を被った男性は、磨り減った下駄履きでくつろいだ様子。
- ⑤ 濡れた藁草履を干してある。
- ⑥ 杉皮葺きの建物は、当時の鮎川では比較的空間の大きな建物では一般的であった。
- ⑦ 石畳に使用されている花崗岩のように見える石は、牡鹿半島産ではない。男性の足元から坂になり一段下がっている。
- ⑧ テント生地のような丈夫な布で通気性のある壁を作っているのだろうか。
- ⑨ 四本の煙突が延びている製油工場では、マッコウクジラの脳油を加工する工場、潤滑油や燃料として出荷された。

● 27370/1910.6/くつろぐノルウェー人たち



- ①ノルウェー人たち。初期の鮎川の捕鯨は、ノルウェー式捕鯨に用いる捕鯨船を輸入するだけでなく、砲手などの要職をノルウェー人が担っていた。家族を連れて移住した人もあり、石巻市内にもノルウェー屋敷と呼ばれていた場所があった。
- ②東洋捕鯨株式会社の事業場の向かい側にあたる南地区の東洋捕鯨事業員長の伊藤利平氏宅か、観潮楼と呼ばれた場所かと思われる。撮影場所は現在の鮎川のみなみ荘まえあたりか。
- ③貴賓のある女性。男性とともにラタン（籐）製のアームチェアに腰掛けている。
- ④値上がり松。
- ⑤砂除け・風除けの生垣。
- ⑥砲手。当時は高給で雇われていた。例えば、当時のニコライ丸砲手ジョルデンセンの給料は一ヶ月二五〇円で、当時の鮎川村長の月給二五円の十倍であったという。また、明治四一年の丸三製材捕鯨部の「丸三丸」のノルウェー人砲手の給料は一五〇円、歩合として一頭三五円であるのに対し、日本人砲手は給料五〇円、歩合として一頭五円であったという記録がある。

● 26954・27134・27216/1910.6/ナガスクジラの解剖作業



- ①ナガスクジラの解剖。
- ②尾びれから瀬に向かって切れ目を入れている。
- ③捕鯨鉤が刺さったままになっている。
- ④ザトウクジラを引き揚げている。
- ⑤スリップウェイの石垣。湖が引いてあらわになった。
- ⑥クジラの引き揚げ時に使用される伝馬船。
- ⑦脳油をすくう際に使う柄杓。
- ⑧スリップウェイ上で待機する男たち。
- ⑨解剖員ではない服装の人物。見学をしているのか。
- ⑩すべて解剖用ボックの手前あたりから撮影している。



明治 43 年の鮎川全景 (ロイ・C・アンドリュース撮影) Image #26827, 27353, 26839 を合成して作成



昭和 25 年頃の鮎川全景 (絵はがき)

アンドリュース著
『砲とカメラで鯨を追う』に掲載された
鮎川撮影の写真とキャプション

加藤 幸治・宇仁 義和
小泉 友美・吉田 真子

P13/27364



“The harpoon gun on the *Rex Maru*. The gun is loaded and the harpoon is shown projecting from the muzzle ; coiled on the iron pan below is the rope which is carried with the iron in its flight. The winch may be seen in front of the bridge at the left of the picture.”

(レックス丸の捕鯨砲。砲が装填され、捕鯨鉞が砲口から突き出て見えている。下にある鉄製の受け皿の上に巻きつけられたのは、鉞がとともに放出されるロープである。ウインチが写真の左側の操舵室の前に見える。)

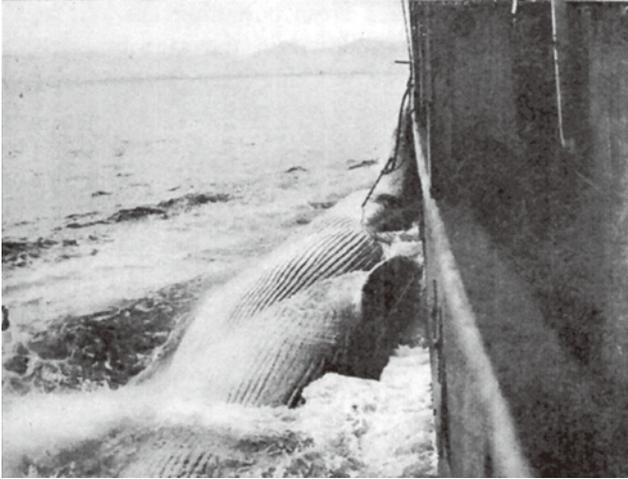
P26/27156



Loading the harpoon-gun. “The charge is 300 to 375 drams of very coarse, black powder which is… rammed home from the muzzle ; then come wads of okum (oakum の誤り), hard rubber or cork. After which the harpoon… is hammered solidly into place.”

(捕鯨砲の装填をしている。「充填するものは300~375ドラムの非常に粗い黒い粉で、砲口から詰め込まれる。その後、丸めたロープの塊、硬いゴムやコルクといったものを捕鯨鉞を入れたあとで、そこにしっかりと叩き入れる。』)

P34/ネガヤオリジナルプリント未発見



“A hollow, spear-pointed tube of steel... was jabbed well down into the whale’s abdomen, the engines started, and the animal slowly filled with air.”

(「中空の槍先がクジラの腹部に刺され、エンジンが始動し、クジラにゆっくりと空気が充填された。」)

P53/27231



Bringing in a humpback at the end of the day’s hunt. The whale’s flukes weigh more than a ton.
(この日の操業の終わりにザトウクジラを運ぶ。クジラの尾びれの重さは1トン以上である。)

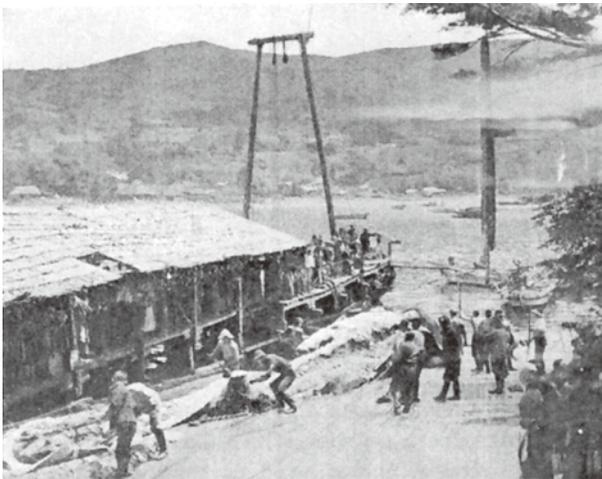
P73/27215



A humpback partly in the water at the station in North Japan. The whale is lying on its side with the breast and flipper showing.

(北日本の事業場で一部が水中に浸かったザトウクジラ。クジラは胸と胸ビレを露わにして横たわっている。)

P78/ネガやオリジナルプリント未発見



“In some instance the whales are drawn out upon the slip in the Norwegian way.”

(「場合によっては、クジラはノルウェー式に斜路に引き上げられる。」)

P80/27117



“She was listing far to starboard and we could see the huge flukes of a blue whale… waving at her bow.”
（「船は右舷方向に傾いていて、舳先のところで揺れているシロナガスクジラの巨大な尾びれが見える…」）

※ネガのキャプションはナガスクジラとしている。（27115 594 “San Hogeï Maru” bringing in a Finback-whale ship showing. 1163）

P81/27162



“A steel wire cable was looped about the tail just in front of the flukes, and the huge carcass drawn slowly upward over the end of the wharf.”

（「鉄線ケーブルが尾びれの前の辺りに巻き付けられ、巨大な死体が棧橋の端にゆっくりと引き上げられた。」）

P83/27020



“Section by section the carcass was cut apart and drawn upward to fall into the hands of the men on the wharf and be sliced into great block two or three feet square.”

(「部位ごとに鯨は切り取られて、上方に引き上げながら棧橋の作業者のところに落とされる。そして2～3フィート四方の大きな塊に切り分けられる。」)

P92/26839



The whaling station at Aikawa, Noth Japan. “Aikawa is a typical little fishing village, situated at the end of a beautiful bay which sometimes harbors as many as fourteen whale ships from the four neighboring station.”

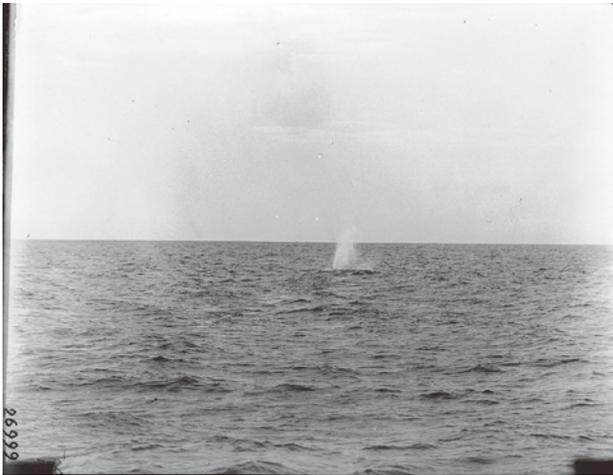
(北日本にある鮎川の捕鯨事業場。「鮎川は典型的な小さな漁村で、美しい湾に位置している。湾には時々、近くにある4つの事業場から14隻もの捕鯨船が係留される。」)

P93/26914



A sai whale on the slip at Aikawa. This species is allied to the finback but is smaller.
(鮎川の斜路のイワシクジラ。この種はナガスクジラの仲間であるが小さめである。)

P94/26999



“The spout of a sai whale. The column of vapor shoots straight upward and is lower and less dense than that of the finback.”
(「イワシクジラの噴気。しぶきの柱はまっすぐ上に吹き上がり、ナガスクジラのそれよりも低く密度も低い。」)

P95/27040



“He... would sometimes swim just under the surface with only the tip of the dorsal fin exposed.”
（「クジラは時に、海面のすぐ下を泳ぎ、背びれの先だけを外に出すことがあった。」）

P97/26996



“I pressed the button of the camera as the broad back came into view.”
（「広い背中が見えたタイミングでカメラのシャッターを切った。」）

P101/26955



A sai whale at Aikawa, Japan. This species is about forty-eight feet long and is allied to the finback and blue whales.

(日本・鮎川のイワシクジラ。この種は約48フィートの長さで、ナガスクジラとシロナガスクジラの仲間とされる。)

P102/26985



“There’s a whale dead ahead. He spouted six times.”
〔正面に死んだクジラがいる。彼は6回も噴気した。〕

P105/26932



“We were just off Kinka-san at half-past six, and by seven were blowing the whistle at the entrance to the bay.”

(「私たちは6時半には金華山を離れ、7時までには湾の入口で汽笛を鳴らした。」)

P107/26876



“We hunted them for two hours, trying first one and then the other — they had separated — without getting near enough even for pictures.”

(「私たちは2時間にわたって漁をした。一頭を狙ってそして次といったように。クジラは離れていたの、写真に撮れるほど十分に近づけなかった。」)

P108/27012



“He was running fast but seldom stayed down long, his high sickle-shaped dorsal fin cutting the surface first in one direction, then in another.”

(「クジラは速く泳いだが、時には長い間同じところにとどまっていた。高い鎌形背びれは、海面を一方向に切ったと思ったら、違う向きに切っていく。」)

P109/26977



“Always the center of a screaming flock of birds which sometimes swept downward in a cloud, dipping into the waves drops from their brown wings.”

(「いつも雲のなかで下向きに吹き飛んでいる鳥の叫ぶ群れの中心は、波の中に浸って、茶色の翼から落ちる。」)

P111/26915



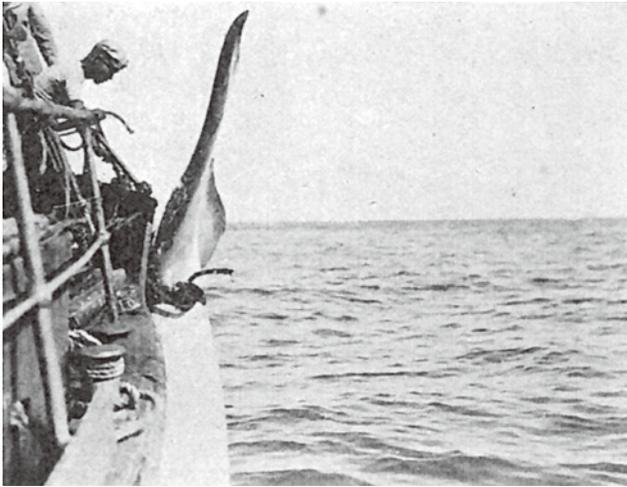
A sei whale showing a portion of the soft fatty tongue.
(柔らかい脂肪の舌の部分であらわにしたイワシクジラ。)

P118/26998



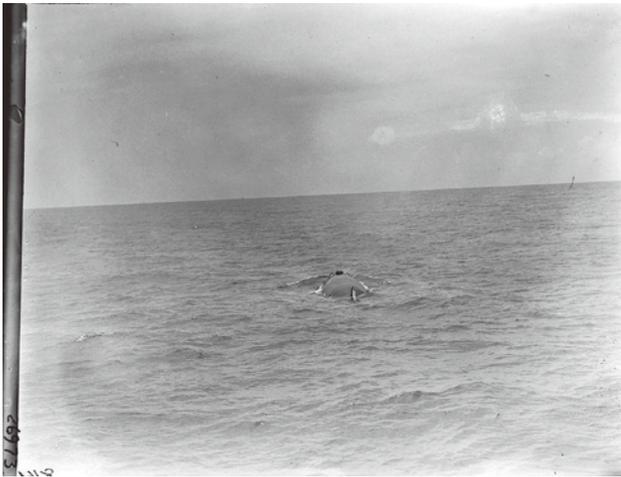
“Two boat hooks are jabbed into the shark’s gills and it was hauled along the ship’s side until it could be pulled on deck.”
(「2つのボートのフックがサメのえらに突き刺さってしまい、船の側に沿って運ばれて、甲板に引き上げられた。」)

P119/ネガやオリジナルプリント未発見



Making the sei whale fast to the bow of the ship.
(イワシクジラを素早く船首に固定する。)

P120/26973



A sei whale swimming directly away from the ship. The nostrils or blowholes are widely expanded and greatly protruded.
(船からまっすぐ離れて泳いで行くイワシクジラ。鼻孔あるいは噴気口が大きく広がり、突出している。)

P122/26925



“For many years the sai whale was supposed to be the young of either the blue or the finback whale, and it was not until 1828 that it was recognized by science as being a distinct species.”

(「何年もの間、イワシクジラはシロナガスクジラかナガスクジラのどちらかの若いものと思われてきたが、1828年以降は科学的に別種と認識された。」)

P127/26967



“The sai whale has a roving disposition and wanders restlessly from one coast to another, sometimes… suddenly appearing in waters where it has never before been known,”

(「イワシクジラはうろろする性質を持ち、海岸から海岸へと休みなく彷徨う。時には突然現れたことのない海域にも姿を現す。」)

P131/27160



“For ten minutes the silence continued, then the Captain said in a quiet voice : ‘There he is, far away on the beam!’”

(「10分間にわたって沈黙が続き、船長は静かな声で言った。「あそこだ、真横の遠方」)

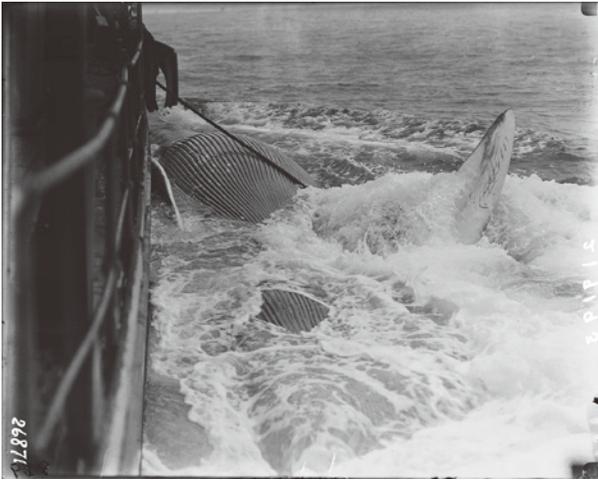
P134/26878



“I ran on deck just as the brute rounded up right beside the bow and the gun flashed out in the darkness.”

(「私は駆り出された獣のように船首のすぐ近くの甲板を走ると、捕鯨砲が暗闇の中で光を放った。」)

P137/26871



“The rope attached to the first harpoon floated backward in dangerous proximity to the propeller and it required some careful work to get the animal fast to the bow and the line safely out of the way.”

(「最初の捕鯨鉤に付けたロープが、後ろの方に流れていき、プロペラに近づいて危なくなったので、クジラを安全に船首に結び、ロープをよける慎重な作業が必要だった。」)

P138/26854



Bringing the blue whale to the station. The carcass is almost as long as the ship.

(シロナガスクジラを事業場に運ぶ。クジラはほとんど船と同じぐらいの大きさである。)

P141/26882



A blue whale at Aikawa, Japan. “The largest specimen which has yet actually measured and recorded is one 87 feet long, stranded a few years ago upon the coast of New Zealand ; this animal must have weighed at least 75 tons.”

(日本・鮎川のシロナガスクジラ。「実際に測定して記録した最大の標本は、87 フィートの長さで、数年前にニュージーランドの海岸に座礁したものである。この個体は少なくとも 75 トンの体重があろう。」)

P149/27356



Posterior view of a blue whale on the slip at Aikawa, Japan. The flukes have been cut off and the wide thin caudal portion of the body is well shown.

(日本・鮎川の斜路のシロナガスクジラの後ろからの写真。尾びれは切り落とされ、幅広く薄い尾部がよく見える。)

P160/26865



“I was standing on the bridge with the camera focused and pressed the button as they rose to the surface.”
（「私はカメラの焦点を合わせながら操舵室に立っていて、クジラが海面に上がった瞬間にシャッターを押した。」）

P173/27165



Drawing up a finback at Aikawa, Japan.
（日本・鮎川で、ナガスクジラの吊上げ。）

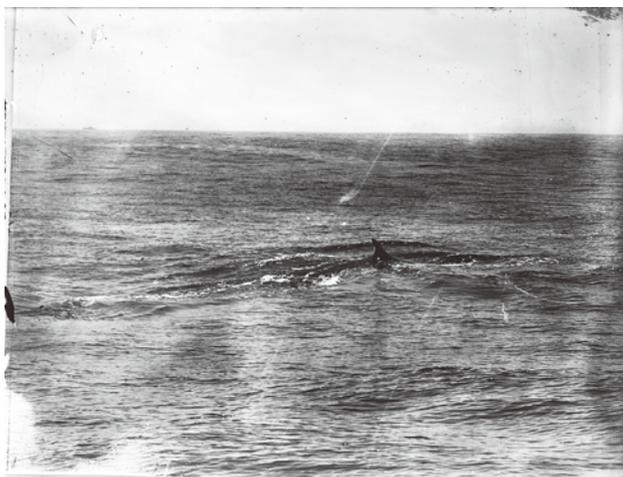
P175/27134



The long slender body of a finback lying on its side : the outer edges of the whalebone plates in the mouth are well shown.

(横たわる細長い胴体のナガスクジラ : 口の中のヒゲ板の外側の縁が良くわかる。)

P180/27102



When sounding the finback sinks lower and lower until the dorsal fin disappears ; this is the last part of the body to leave the surface. This species never draws out the flukes as do the humpback, sperm and right whales.

(ナガスクジラが音を立てて沈んでいき、背びれが見えなくなった。これは海面から隠れる体の最後の部分です。この種は、ザトウクジラ、マッコウクジラ、セミクジラがそうするのとは異なり、尾びれを海面から出さない。)

P229/27282



Cutting away the “junk” from the “case” of a sperm whale. The junk is a mass of cellular tissue which also contains spermaceti.

(マッコウクジラの「ケース」(脳油の入った頭の部位の通称)から「ジャンク」を取り除く。「ジャンク」もまた脳油を含む細胞組織の塊である。)

P231/219194



An anterior view of a young male sperm whale. The head occupies one-third the entire length of the animal and the lower jaw is much shorter than the upper.

(若いオスのマッコウクジラの前からの写真。頭部は全長の3分の1を占め、下あごは上あごよりもはるかに短い。)

P233/27289



The tongue of a sperm whale ; it is strikingly different from the enormous flabby tongue of the whalebone whales.

(マッコウクジラの舌 ; ヒゲクジラの大きくブヨブヨした舌とは大きく異なる。)

P234/27258



The head of the sixty-foot sperm whale, the skeleton of which was sent to the American Museum of Natural History, from Japan. The “case” yielded 20 barrels of spermaceti.

(60 フィートのマッコウクジラの頭部。骨格は日本からアメリカ自然史博物館に送られた。「ケース」からは 20 バレルの脳油が採れた。)

P236/27265



A posterior view of the head of the Museum's sperm whale. The thick covering of blubber which encircle the head is well shown.

(アメリカ自然史博物館のマッコウクジラの頭部の後ろからの写真。分厚い脂皮が頭部を取り巻く様子がよく見える。)

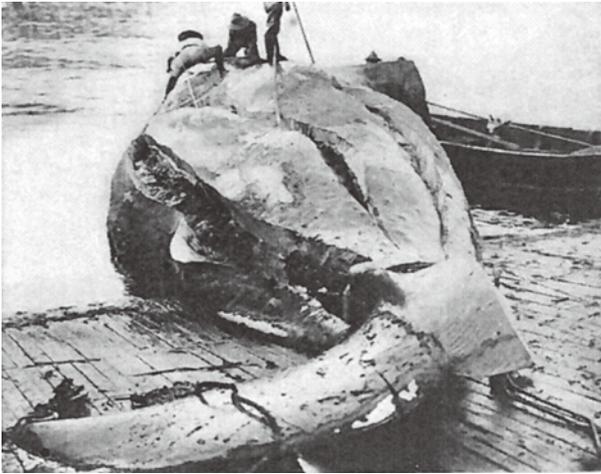
P239/27299



A female sperm whale at Aikawa, Japan. The head of the female is much more pointed than that of the male.

(日本・鮎川のメスのマッコウクジラ。メスの頭は男性の頭よりはるかに尖っている。)

P241/ネガやオリジナルプリント未発見



A posterior view of the Museum's sperm whale. Longitudinal cuts have been made through the blubber revealing the flesh beneath.

(博物館 (アメリカ自然史博物館) 所蔵のマッコウジラの後ろからの写真。縦方向で脂肪を裁割し、その下の肉があらわになっている。)

P294/27334



A pacific blackfish (*Globocephalus scammoni*). This species has no white on the under parts. (太平洋のゴンドウジラ (コピレゴンドウの学名)。この種は、下の部分が白くない。)

ロイ・チャップマン・アンドリュース
鮎川調査全写真

宇 仁 義 和

資料整理作業協力：稲辺大樹・小島勇紀・菅原 陸・細谷敦生・渡部 渉

索引

クジラの種名は通常は小文字で記載するが、元の表記に従い大文字から始めた。リスト中の学名は誤りやミスタイプが見られる。なお、アンドリュースは鮫川を Aikawa と記している。また、[] 内は編者による訂正や追記である。

Blue whale	シロナガスクジラ
Finback whale	ナガスクジラ
Sei whale	イワシクジラ
Humpback whale	ザトウクジラ
Sperm whale	マッコウクジラ
Lagenorhynchus obliquidens	カマイルカ <i>L. obliquidens</i> もおなじ
Tursis borealis	セミイルカ (古い学名か) <i>L. borealis</i> もおなじ
Phocoenoides truei	リクゼンイルカ <i>Phocoena N. sp</i> もおなじ
Globiocephalus scammoni	コビレゴンドウ (北東太平洋の個体群に使われていた学名)
Sword fish	カジキ
Gull	カモメ
raven	カラス (ワタリガラスを指すが、ここでは総称)
flensing	鯨の解剖
dorsal	背の、背側の
lateral	横の、側面の
anterior	前部の、前半身
posterior	後部の、後半身
sternum	胸骨
scapula	肩胛骨
pectoral fin	胸びれ、pectoral で胸の
peduncle	尾柄
fluke	尾びれ
genitalia	外性器
umbilicus	へそ
navel	へそ
furrow	うね
nostrils	鼻孔
spout	噴気
blubber	脂皮
spermaceti	脳油

ここに掲載した写真は、すべてアメリカ自然史博物館研究図書館の所蔵である。複写は JSPS 科学研究費補助金「もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開」(基盤研究 C: 2011-2013 課題番号 23501209) による補助を得て行った。



26823 Shiogama Hotel. Shiogama is a little village where I took the boat for Aikawa. It is a typical Japanese hotel. 864



26825 A typical farm house at Aikawa. 866



26826 Gulls on beach at Aikawa. 867



26827 View of Aikawa village—rice field in background



26833 Same as Nos 566-9 874



26834 Gulls and ravens on beach at Aikawa. 875



26835 Two ravens on beach, Aikawa, Japan. 876



26836 Women picking up oysters on beach at Aikawa, Japan. 877



26837 Three Geishas near shrine. Aikawa, Japan. 878



26838 Three Geishas near shrine. Aikawa, Japan. Same as 986. Near view. 879



26839 Whaling station from hill in rear. Aikawa, Japan. 880



26840 Ten whaling ships in bay at Aikawa, Japan. 881



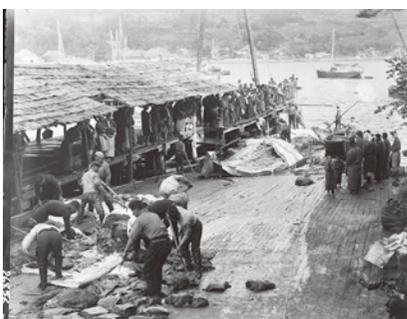
26841 Ten whaling ships in bay at Aikawa, Japan. Same as 838 882



26854 "Hogei Maru No. 3" with Blue Whale alongside. Aikawa, Japan. 1263



26855 Casting of whale from bow of "Hogei Maru" No. 3". Aikawa, Japan. 1264



26856 Flensing Blue Whale No. 14. Far view. Aikawa, Japan. 1265



26857 Pedemcle [Peduncle] of Blue Whale No. 14. Aikawa, Japan. 1266



26858 Back and upper sides, Blue Whale, No. 14. Aikawa, Japan. 1267



26859 Breast and edge of fin, Blue Whale No.14. Aikawa, Japan. 1268



26860 Dorsal fin of Blue Whale No. 14. Aikawa, Japan. 1269



26861 Sternum of Blue Whale No. 14. Aikawa, Japan. 1270



26862 Blue Whale No. 39 ♀. Dorsal fin. Aikawa, Japan. 1271



26863 Blue Whale No. 39 ♀. Superior surface, right fin. Aikawa, Japan. 1272



26864 Blue Whale No. 39 ♀. Edge (anterior) of, right fin. Aikawa, Japan. 1274



26865 Shooting a whale.



26866 Blue Whale spouting. Fast to ship by one harpoon (rain). Near Aikawa, Japan. 1276



26867 Same as No. 824. 1277



26868 Blue Whale diving close to ship. (back of whale) 1278



26869 Blue Whale being towed to station beside ship. Aikawa, Japan. 1279



26870 Same as 827. 1280



26871



26872 Same as 827-8-9. 1282



26873 Same as 827-8-9-30. 1283



26874 Same as 827-831. 1284



26875 Blue Whale spouting fast to ship. (rain). 1285



26876 Blue Whale near ship. Head, blowholes, and back. 1286



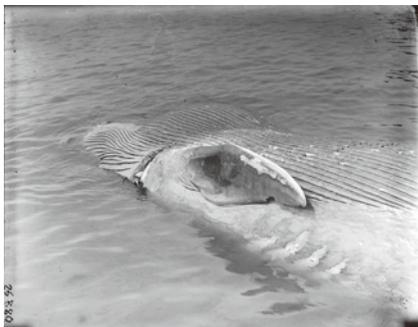
26877 Blue Whale near ship, back and blowholes. 1287



26878 Bow of ship and whale diving. 1288



26879 Same as No. 927. 1289



26880 Blue Whale No. 55 ♀. Pectoral fin. Aikawa, Japan. 1290



26881 Blue Whale No. 55 ♀. Peduncle, Aikawa, Japan. 1291



26882 Same as 831 (827-832) All same. 1291



26883 Blue Whale No. 55 ♀. Breast view of whole whale. Aikawa, Japan. 1293



26894 Right scapula of Sei Whale No. 19. Inner surface. Aikawa, Japan. 923



26895 Same as 572. 924



26896 Left pectoral fin, inner view of Sei Whale No. 19. Aikawa, Japan. 925



26897



26898 Left pectoral fin of Sei Whale No. 19. Showing planges. Aikawa, Japan. 927



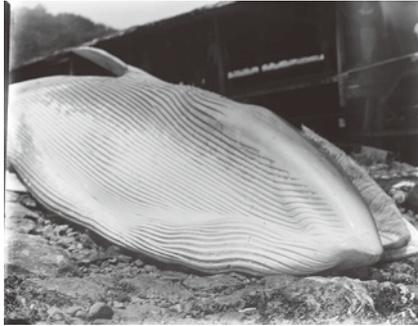
26899 Same as 576. Near view. 928



26900 Dorsal fin of Sei Whale No. 19, Aikawa, Japan. 929



26901 Dorsal fin of Sei Whale No. 24, Aikawa, Japan. 930



26902 Throat of Sei whale No. 26, Aikawa, Japan. 931



26903 Throat and breast of Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 932



26904 Fluke (below) of Sei whale, No. 26. Aikawa, Japan. 933



26905 Breast and belly of Sei whale No. 26. Aikawa, Japan. 934



26906 Back showing fin of Sei whale No. 26, Aikawa, Japan. 935



26907 Peduncle and upper sides of Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 936



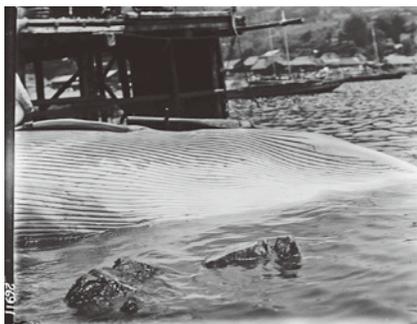
26908 Whole length from behind Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 937



26909 3/4 view from behind Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 938



26910 Breast and fin (below) of Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 939



26911 Breast and throat of Sei Whale No. 26, Aikawa, Japan. 940



26912 Baleen of Sei Whale No. 26. Aikawa, Japan. 941



26913 Baleen of Sei Whale No. 26 in water. Aikawa, Japan. 942



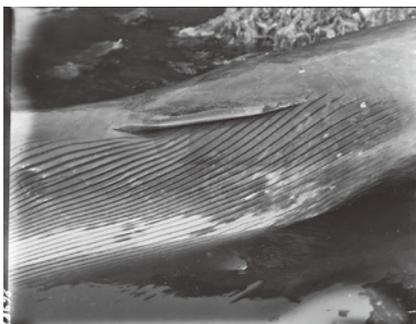
26914 Sei Whale No. 34 ♂. Whole view of body. Aikawa, Japan. 943



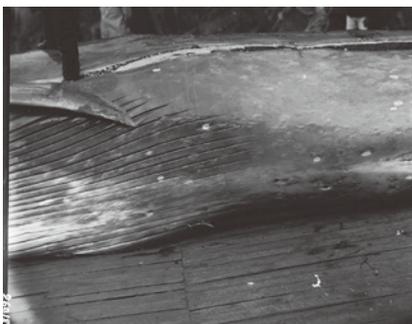
26915 Same as 671 (near vies) 944



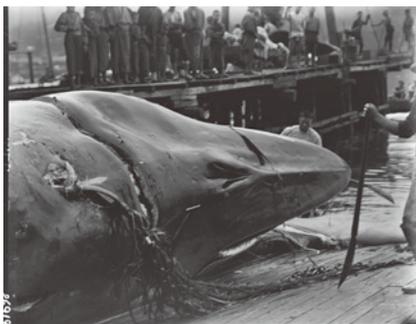
26916 View of breast and belly, Aikawa, Japan. 945



26917 Sei Whale No. 34 ♂, breast and edge of fin. Aikawa, Japan. 946



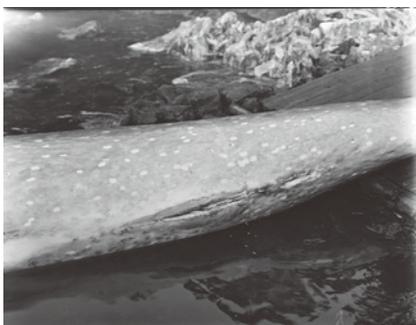
26918 Sei Whale No. 34 ♂, end of folds. Aikawa, Japan. 947



26919 Sei Whale No. 34 ♂, Top of head. Aikawa, Japan. 948



26920 Sei Whale No. 34 ♂, Blowholes. Aikawa, Japan. 949



26921 Genitalia of Sei Whale No. 34 ♂. Aikawa, Japan. 950



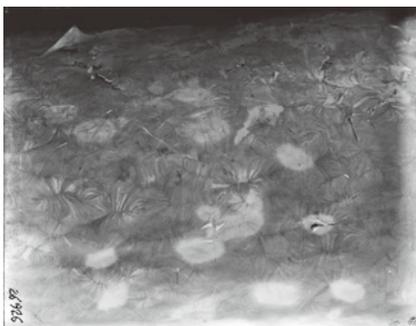
26923 Sei Whale No. 34 ♂. Side and fin (in water). Aikawa, Japan. 952



26924 Sei Whale No. 34 ♂. Parasites in situ. Aikawa, Japan.



26925 Sei Whale No. 35 ♀. Side view, whale length on slip. Aikawa, Japan.



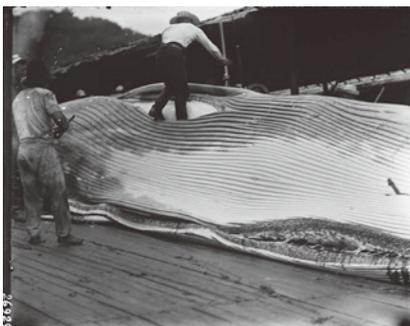
26926 Sei Whale No. 35 ♀. Skin showing markings. Aikawa, Japan. 955



26927 Sei Whale No. 35 ♀. Dorsal fin. Aikawa, Japan. 956



26928 Sei Whale No. 35 ♀. Genitalia. Aikawa, Japan. 957



26929 Sei Whale No. 35 ♀. Breast-near view. Aikawa, Japan. 958



26930 Sei Whale No. 35 ♀. Umbilicus. Aikawa, Japan. 959



26931 Sei Whale No. 35 ♀. Eye. Aikawa, Japan.



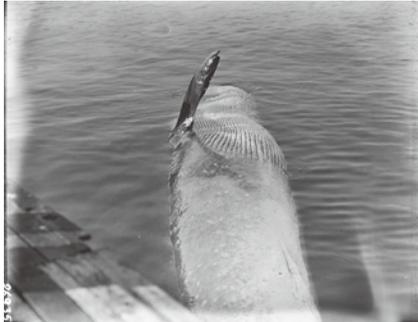
26932 Sei Whale No. 35 ♀ being brought to wharf lug. "Rekksu Maru" Aikawa, Japan. 961



26933 "Rekku Maru" bringing in Sei Whale No. 36 ♂. Aikawa, Japan 962



26934 Sei whale "Rexmaru"



26935 Sei Whale No. 36 ♂ in water. View of side and fin. Aikawa, Japan. 964



26936 Sei Whale No. 36 ♂. Genitalia. Aikawa, Japan. 965



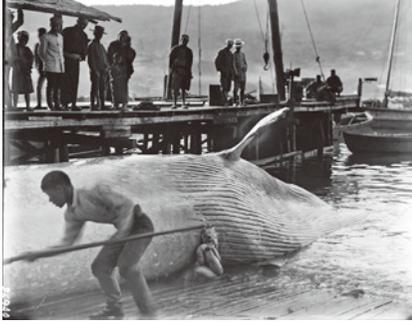
26937 Same as 695. 966



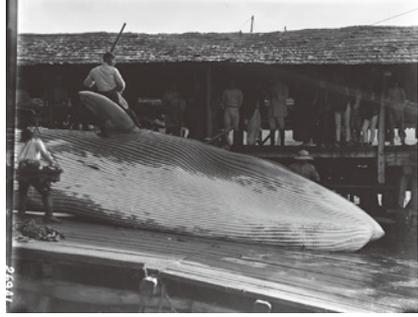
26938 Sei Whale No. 36 ♂. Throat and breast. Aikawa, Japan. 967



26939 Sei Whale No. 36 ♂. Breast and belly, Aikawa, Japan. 968



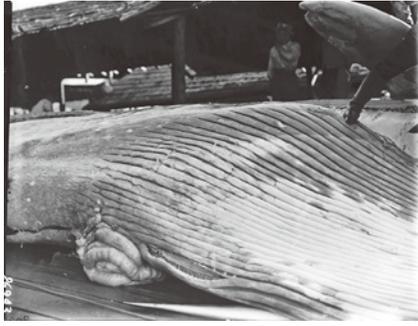
26940 Same as 698 from behind. 969



26941 Sei Whale No. 36 ♂. Throat and breast. Aikawa, Japan. 970



26942 Sei Whale No. 36 ♂. Umbilis[c]us. Aikawa, Japan 971



26943 Sei Whale No. 35 ♂. End of furrows. Aikawa, Japan. 972



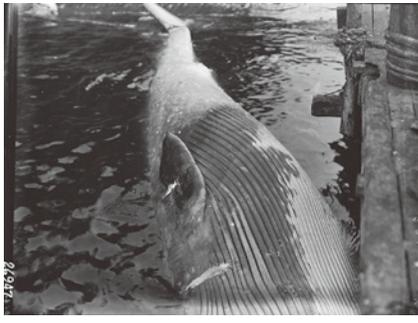
26944 Sei Whale No. 36 ♂. Fin. Aikawa, Japan. 973



26945 Sei Whale No. 38. View of whale body. Aikawa, Japan. 974



26946 Same as No. 714 Aikana. 975



26947 Sei Whale No. 38. Fin and posterior half of body. Aikawa, Japan. 976



26948 Sei Whale No. 38. Left side Throat and hump. Aikawa, Japan. 976



26949 Sei Whale No. 38. Fin and posterior half of body. Aikawa, Japan. 978



26950 Sei Whale No. 38. Posterior half of body. Aikawa, Japan. 979



26951 Sei Whale No. 38. Head and back. Aikawa, Japan. 980



26952 Sei Whale No. 38. Dorsal view. Aikawa, Japan. 981



26953 Sei Whale No. 38, lying in water. Aikawa, Japan. 982



26954 Sei Whale No. 41 ♂. Far view, whale body. Aikawa, Japan. 983



26955 Same as 744. Aikawa, Japan. 984



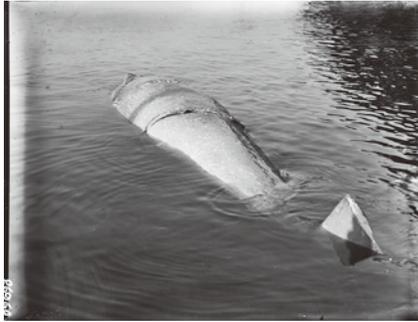
26956 Sei Whale No. 41 ♂ partly in water. Aikawa, Japan. 985



26958 Same as 74607. Near view of s[w]hole body. 987



26959 Sei Whale No. 41 ♂. Skin showing markings. Aikawa, Japan. 988



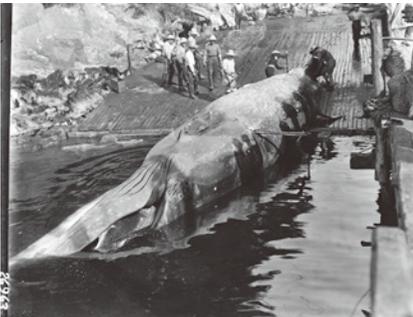
26960 Sei Whale No. 41 ♂. in water. Aikawa, Japan. 989



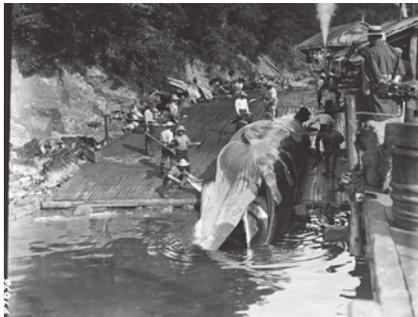
26961 Dorsal fin of Sei Whale No. 41 ♂. Aikawa, Japan. 990



26962 A Sei Whale lying in water, Aikawa, Japan. 991



26963 Sei Whale No. 43, partly in water. Aikawa, Japan, 992



26964 Same as 773. Fur view. 993



26965 Same as No. 779. 994



26966 Sei Whale No. 43, entirely on slip. Aikawa, Japan. 995



26967 Sei Whale No. 43 partly on slip. Aikawa, Japan. 996



26969 Sei Whale No. 43. Fin and side of body (harpoon). Aikawa, Japan. 998



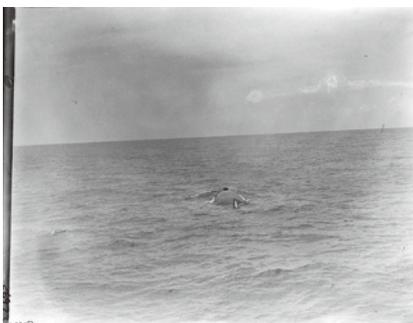
26970 Sei Whale No. 43. Breast and belly. Aikawa, Japan. 999



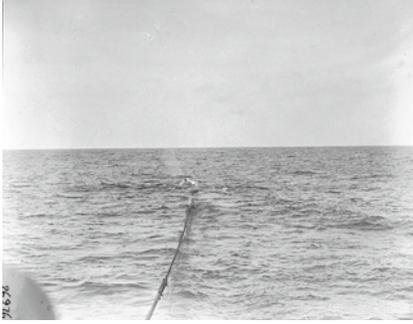
26971 Sei Whale No. 43, lying in water (Harpoon). Aikawa, Japan. 1000



26972 Sei Whale No. 43, lying in water breast down. Aikawa, Japan. 1007 [1001?]



26973 Sei Whale near slip, nostrils open. 1002



26976 Same as 843. Far. 1005



26977 Birds hovering over track of Sei Whale. 1006



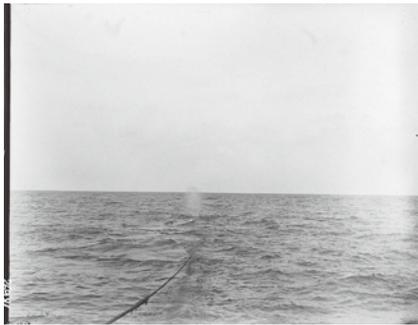
26978 Same as 846, Dorsal showing. 1007



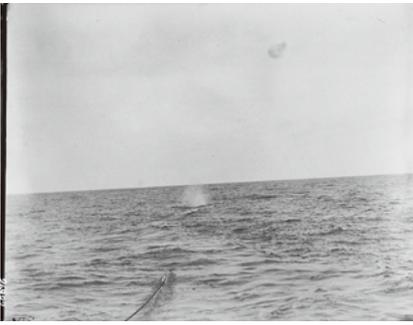
26979 Sei Whale (direct back-view) dorsal fin and back, far away. Aikawa, Japan. 1008



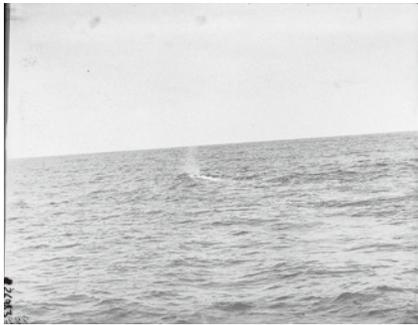
26980 Sei Whale fast to ship, spouting. Strong wind blowing it away. 1009



26981 Sei Whale fast to ship-full spout. 1010



26982 Sei Whale fast to ship, regular spout. 1011



26983 Sei. Whale (free) low, irregular spout. 1012



26984 Sei Whale (free) high, full spout.



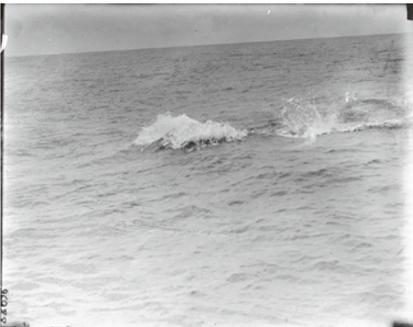
26985 Sei Whale (free) 3/4 back view, nostrils open.
1014



26986 Sei Whale. Throwing line about body. (dead).
1015



26987 Sei Whale . Dead, head and back. 1016



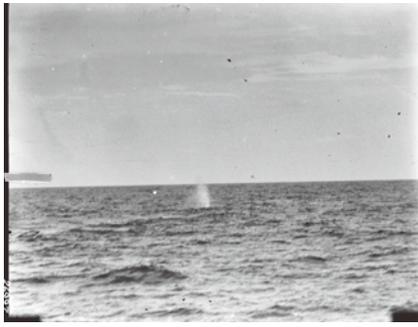
26988 Sei Whale coming for ship-splash in water.
1017



26989 Sei Whale just shot and showing track in water,
where it ran. 1018



26996 Sei Whale (free) back and nostrils open. 1025



26997 Sei Whale (free) spout. (not good). 1026



26998 Pulling a shark out of the water. This shark had been eating the blubber from the whale which had just been killed. It was harpooned and drawn on deck. 883



26999 Sei Whale spout, full & high-side view.



27000 Sei Whale, dorsal fin, back and open blowholes. Spout drifting away.



27001 Tail and peduncle of Sei Whale fast to bow of ship. This whale has just been killed and is being made fast to ship. 1029



27002 Spout of Sei Whale fast to ship. 1030



27003 Making fast dead Sei Whale to bow of ship ; chain just behind dorsal. 1031



27004 Boat hooks in head of shark. 884



27005 This spout of Sei Whale. 1032



27006 Shot at Sei Whale. (Neg. not good). 1033



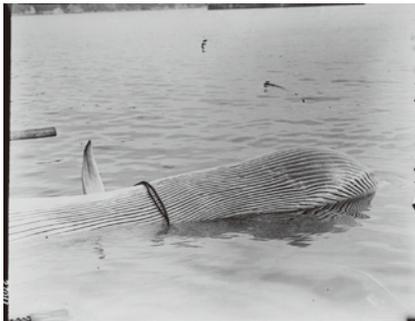
27007 Sei Whale along side ship. Towing to station. 1034



27008 Hauling Sei Whale to surface. 1035



27010 Sei whale during far away



27011 Dead Sei Whale showing gray breast. Whale No. 63 ♂. 1038



27012 Sei Whale showing fin and back. (Taking dive) Captain for slide Whale just before being shot. 1039



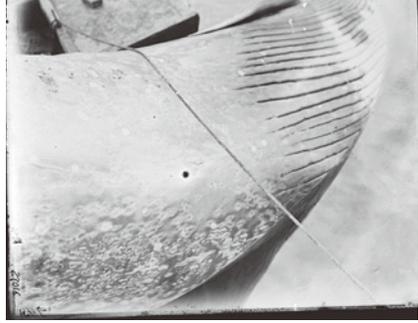
27013 Sei Whale (free), full spout. 1040



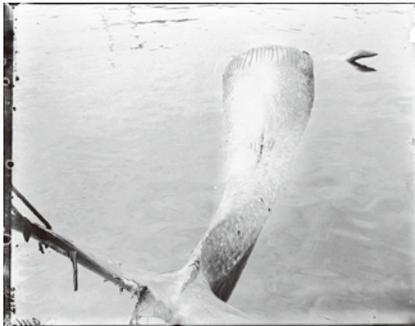
27014 Cutting through the deduncle of a Sei Whale. 1041



27015 Skin of Sei Whale showing markings and white scars. 1042



27016 Sei Whale no ? Navel. 1043



27017 Sei Whale no ? ♀ Whole length in water. 1044



27018 Sei Whale no ? ♀ End of furrows and navel. 1045



27019 Peduncle of Sei Whale suspended. 1046



27020 Same as N. 958. 1047



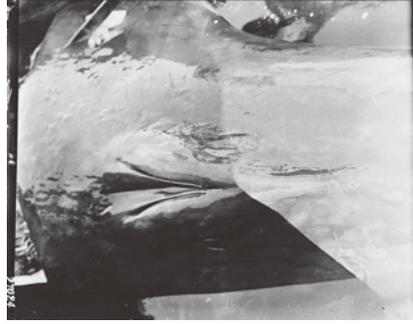
27021 Same as 959. Side view. 1048



27022 Drawing up peduncle of Sei Whale. 1049



27023 Sei Whale No. 65 ♂. Genitalia. 1050



27024 Sei Whale No. 65 ♂. Blowholes. 1051



27025 Same as 970. 1052



27026 "San Hogeï Maru" bringing in Sei Whale No. 65. 1053



27027 "Go Hogeï Maru" bringing in Sei Whale. 1054



27029 Flukes of Sei Whale. 1056



27030 Sei Whale No. ? Just drawn on ship. [subject not match for image]



27031 Same as 982. 1058



27032 Navel of Sei Whale No ? 1059



27033 Sei Whale ♀ Genitalia. 1060



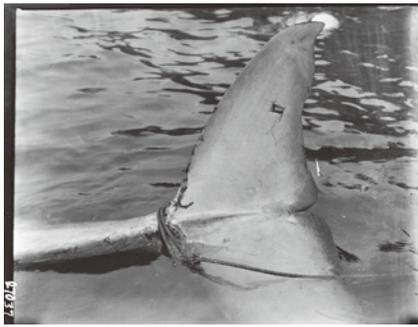
27034 Sei Whale spouting. 1061



27035 Sei Whale (?) Tail. 1062



27036 Cutting up Sei Whale. 1063



27037 Sei Whale (?) tail. 1064



27038 Genitalia, Sei Whale. 1065



27039 Sei Whale, breast view. 1066



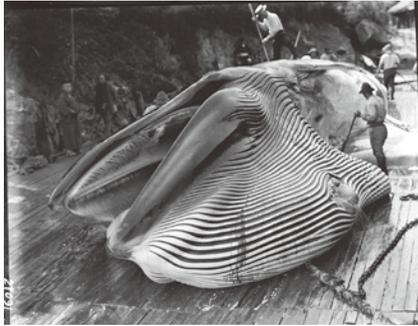
27040 Sei Whale. Dosal fin out of water.



27041 Cutting up a Sei Whale. 1068



27090 Corner of mouth of Finback No. 11. 1138



27091 [Note not photographed]



27092 About to draw Finback No. 11 out of water. 1140



27093 Flensing Finback No. 11. 1141



27094 Same as 505. 1142



27095 Flensing Finback No. 11, next stage. 1143



27096 Same as 505. 1144



27097 Inferior surface, left pictoral of Finback No. 11. 1145



27098 Flensing peduncle of Finback No. 11. 6



27099 Dorsal fin of Finback No. 9. 1147



27100 Peduncle showing "scars" Finback No. 12. 1148



27101 Dorsal fin of Finback No. 13. 1149



27102 Live Finback showing dorsal fin—surface dive. Caption for slide Finback "hale dia[s]appering.



27103 Live finback whale sounding. 1151



27104 Live Finback sounding at a distance. 1152



27105 Cutting up a Finback-taken from cutting wharf. 1153



27106 Cutting up a Finback-blubber of back fin and throat in the air. 1154



27107 Same as 585. 1155



27108 Same as 585-6 inside of throat showing. 1156



27109 Same as 587. 1157



27110 Same as 585. Blubber of throat and back in air. 1158



27111 Same as 589. 1159



27112 Same as 589. Taken from sutting wharf. 1160



27113 Bringing in a Finback-bow of ship, and two men in sampan. 1161



27114 Cutting the harpoon from a Finback. Bow of ship. 1162



27115 "San Hogei Maru" bringign in a Finback-whole ship showing. 1163



27116 Same as 594. Bow of ship. 1164



27117 Same as 594. 1165



27118 Same as 594. 1166



27119 Flukes of Finback No. 23. 1167



27120 Dorsal of Finback No. 23. 1168



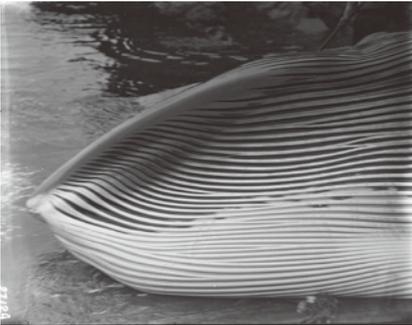
27121 Whole view of Finback No. 23. 1169



27122 Whole length of Finback No. 23. 1170



27123 Genitalia of Finback No. 23. Showing gray points. 1171



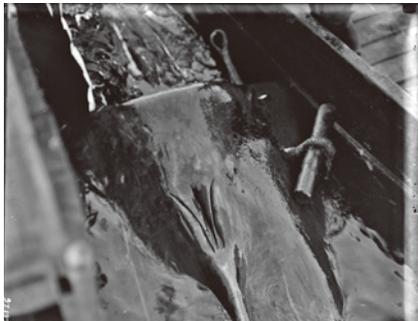
27124 Throat of Finback No. 23. 1172



27125 Side of Finback No. 23. 1173



27126 Finback No. 23 in water showing fin chewed by killer? 1174



27127 Finback blowholes. This whale not numbered. 1175



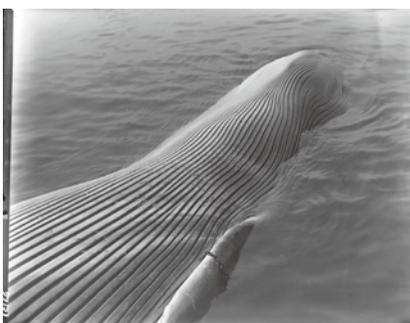
27128 Finback No. 23. Tip of snout showing injury. Whale not numbered. 1176



27129 Finback (not numbered) showing fin and breast. 1177



27130 Finback (not numbered) showing breast, throat, and belly. 1178



27131 Finback (not numbered) showing ramus, throat and breast. 1179



27132 Cutting a Finback, the back blubber suspended. 1180



27133 Blowholes of a Finback. 1181



27134 Finback (not measured) ♂. 1182



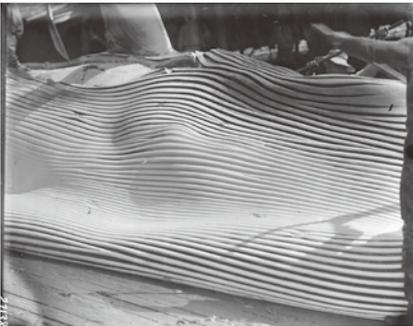
27135 Finback ♂ (not measured) Eye. 1183



27136 Finback ♂ (not measured) Umbilicus. ..84



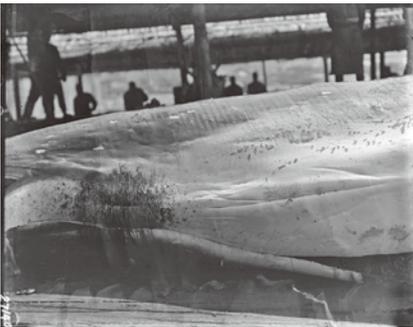
27137 Finback (not measured) ♂. Whole length. 1185



27138 Finback ♂ (not measured). Breast folds. 1186



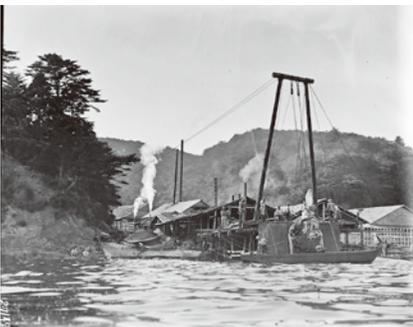
27139 Finback ♂ (not measured) . Fin and man beside it. 1187



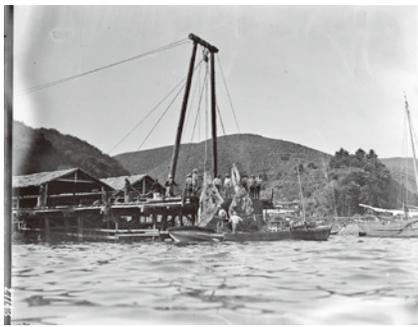
27140 Finback ♂ (not measured). Genitalia. 1188



27141 Cutting a Finback. Head and back being fleuced [fensed?] (from water) . 1189



27142 Same as 750. Far view. 1100. Cutting a Finback. Head and back being fleuced.



27143 Same as 751. Cutting a Finback. Head and back being fleuced. Far view. 1101



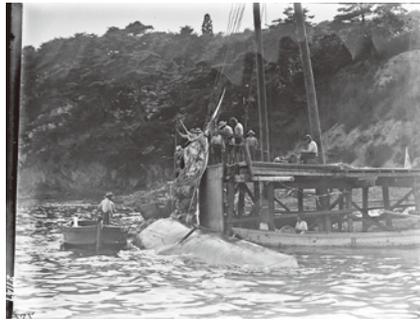
27144 Same as 751-2. Near view. 1192



27145 Cutting a Finback. Flensing head and back. Near view from side. 1193



27146 Same as 754. 1194



27147 Same as 754-5. 1195



27148 Same as 756. 1196



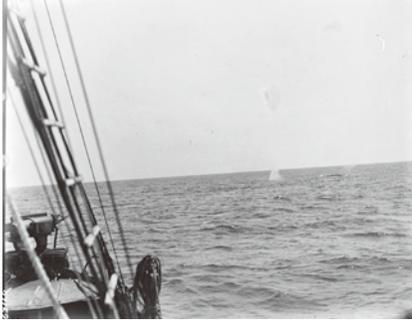
27149 Same as 754-7. 1197



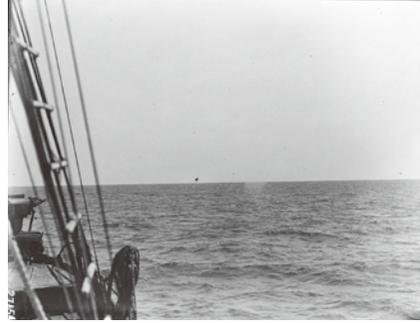
27150 Capt. Fred Olsen and Finback blowing. 1198



27151 Finback spout (irregular, caused by wind). 1199



27152 Finback spout, and second Finback, 1200



27154 Finback spout dissolving. 1202



27155 Capt. Olsen and one Finback. 1203



27156 Loading gun. 885



27157 Hauling chain about flukes of Finback Whale 1204



27158 Finback spout dissolving. 1205



27159 Two Finback Whales. 1206



27160 Finback in distance and Capt. Olsen at gun.
(Capt. and son eating a whale/ caption for slide)



27161 Finback No. ? lying in the water. 1208



27162 Nos. 951-967. Cutting pictures. Drawing up Finback. Side view of whale. 1209



27163 Finback. Peduncle revered and rest of body in water. 1210



27164 Finback. Peduncle suspended up side down. 1211



27165 Drawing up Finback (taken in fog). 1212



27166 Same as 954. 1213



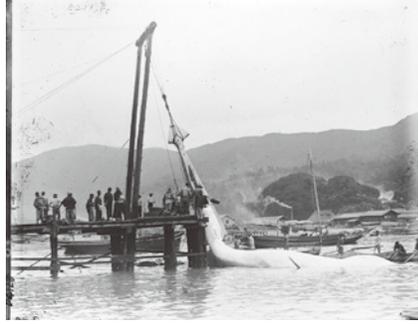
27167 Finback. Breast and blubber suspended. 1214



27168 Finback Whale. Lowering peduncles on to wharf. 1215



27169 Lowering peduncle of Finback on to wharf. 1216



27170 Finback peduncle almost severed. 1217



27171 Drawing up Finback. 1218



27172 Drawing up head of Finback. 1219



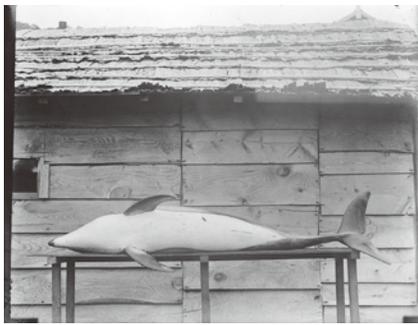
27173 Finback head on wharf. 1220



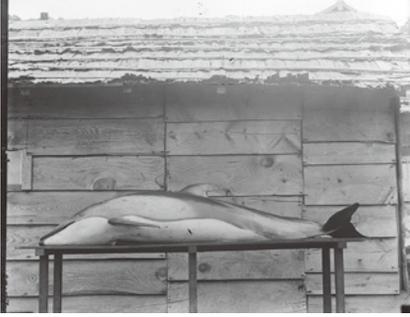
27174 Peduncle of Finback suspended. 1221



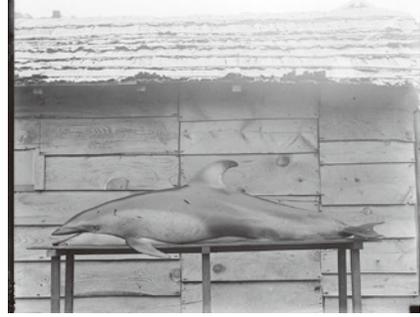
27175 Parasites from Finback. 1222



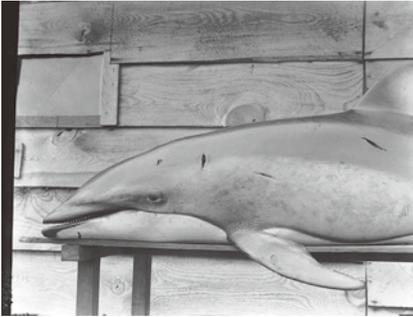
27176 Ventral view. *Lagenorhynchus obliquoides* No. 18. 1223



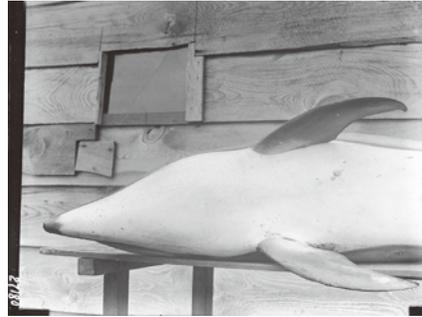
27177 2/3 ventral view of Lagenor[h]ynchus obliquidens No. 18. 1224



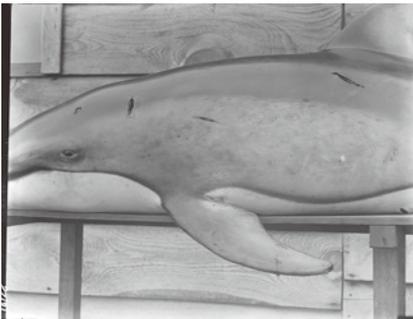
27178 Direct lateral view of Lagenor[h]ynchus obliquidens No. 18. 1225



27179 Lateral view anterior half of body of L. obliquidens No. 18. 1226



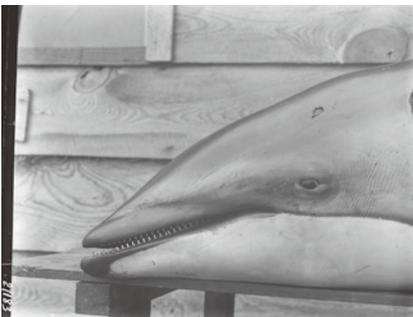
27180 Ventral view, anterior half of body of L. obliquidens No. 18. 1227



27181 Lat. view, middle half of body of L. obliquidens No. 18. 1228



27182 3/4 front view of L. obliquidens No. 18. 1229



27183 Lateral view of head of L. obliquidens No. 18. 1230



27184 Lateral view of dorsal fin of L. obliquidens No. 18. 1231



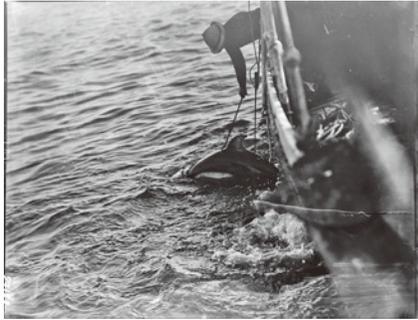
27185 Flukes of *L. obliquidens* No. 18. 128[3]2



27186 Measuring *Lagenor[h]ynchus obliquidens*. 1233



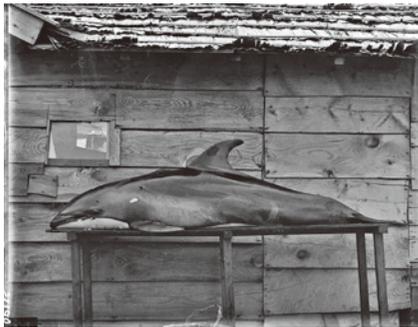
27187 Same as No. 557. 1234



27188 Catching *L. obliquidens*. 1235



27189 *L. obliquidens* taken while alive, side view. 1236



27190 *Lagenor[h]ynchus obliquidens*, No. 30 ♂. Side view of whole body. 1237



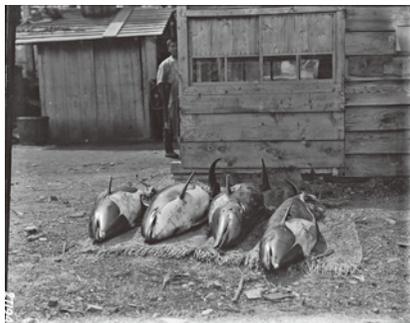
27191 *L. obliquidens* Gill. No. 30 ♂. Side view of body. 1238



27192 *L. obliquidens* Gill. No. 30 ♂. Ventral view of whole body. 1239



27193 Same as 654. 1/2 ventral view/ 1240



27194 *L. obliquidens* and *L. borealis* on ground ; 4specimens. 1241



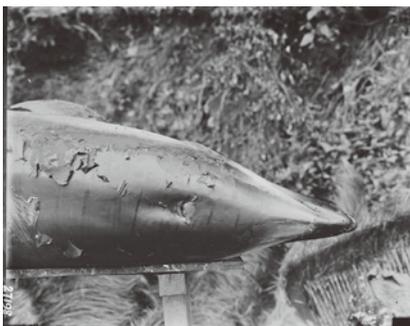
27195 Same as No. 656



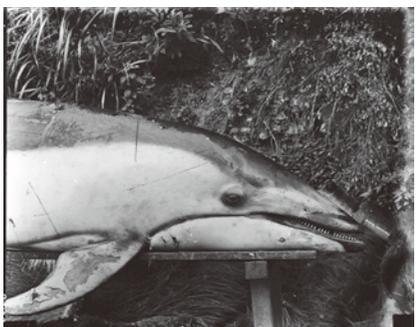
27196 Same as 658. 1243



27197 *Lagenor[h]ynchus obliquidens* Gill, No. 50 3/4 ventral view. 1244



27198 *Lagenor[h]ynchus obliquidens* Gill, No. 50. Top of head. 1245



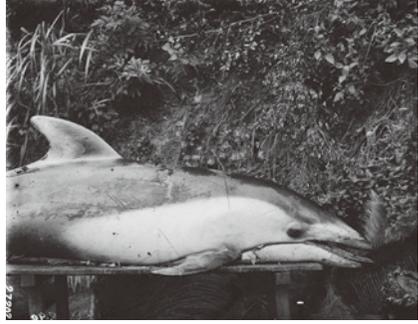
27199 *Lagenor[h]ynchus obliquidens* Gill, No. 50. Side view of hed to fin. 1246



27200 *Lagenor[h]ynchus obliquidens* Gill, No. 50. Side view of whole body. 1247



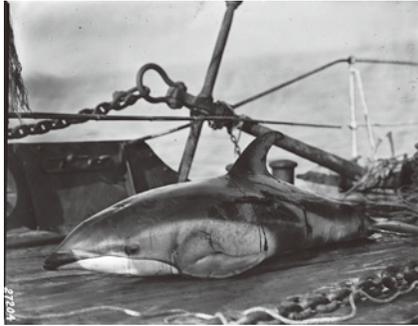
27201 Same as 978



27202 Side view of forpart of boy of *L. olibiquidens* No. 50



27203 Ventral surface of boy of *L. olibiquidens* No. 50



27204 *Lagenor[h]ynchus obliquidens* 3/4 front view. 1251



27205 Inner view of right pectoral fin of Humpback No. 21 jin. 1297



27206 Outer view of right pectoral fin of Humpback No. 21 jin. 1297



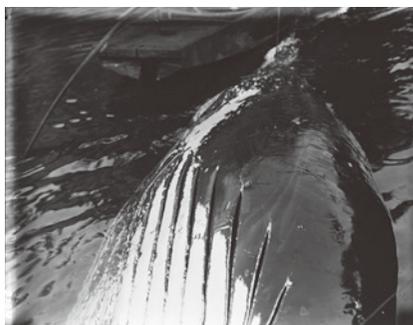
27207 Superior surface of right scapula of Humpback No. 21 jin. 1298



27208 Dorsal fin, Humpback No. 21 jin. 1299



27209 Umbilicus of Humpback No. 25. 1300



27210 Ends of furrows of Humpback No. 25. 1301



27211 Centalia of Humpback whale No. 25. 1302



27212 Mandibular symphysis. Humpback whale No. 25. 1303



27213 Bunch below symphysis. Humpback whale No. 25. 1304



27214 Balun [Baleen] of Humpback whale No. 25. 1305



27215 Breast and edge of fin and whole length of Humpback whale No. 25. 1306



27216 Same as 630. 1307



27217 Same as 630-1 near view. 1308



27218 Peduncle of Humpback whale No. 25 from behind. 1309



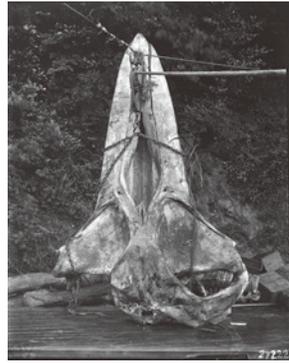
27219 Same as 633. Far view. 1310



27220 Eye of Humpback No. 25. 1311



27221 Dorsal view of Humpback No. 25 ♂.



27222 Same as 766



27223 Same as 766-7 and cutter beside it. 1314



27224 Side view of skull of Humpback No. 25 ♂. 1315



27225 Same as No. 769. 1316



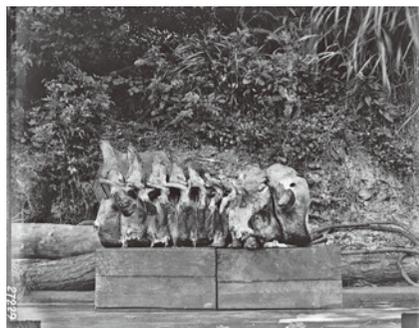
27226 Humpback No. 25 ♂. Nasak in position. 1317



27227 Axis of Humpback No. 25 ♂. 1318



27228 Side view of cervical vertebra and three dorsals of Humpback No. 25 ♂. 1319



27229 Same as No. 773. 1320



27230 Atlas of Humpback No. 25 ♂. 1321



27231 "Rex Maru" with Humpback No. 25, showing flukes. 1322



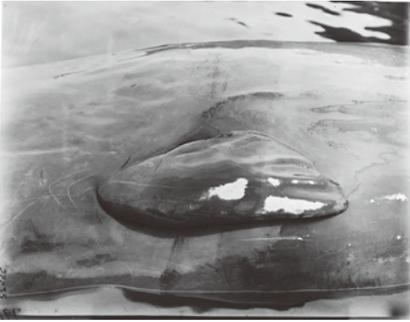
27232 Sperm Whale No. 48 ♂. Whole of body on slip. 1323



27233 Same as 788. Partly on slip. 1324



27234 Sperm Whale No. 48 ♂ Blowhole. 1325



27235 Sperm Whale No. 48 ♂ pectoral fin (attached) 1326



27236 Sperm Whale No. 48 ♂ Posterior view of whole body. 1327



27237 Sperm Whale No. 48 ♂ Mouth pulled open. 1328



27238 Sperm Whale No. 48 ♂ Eye. 1329



27239 Same as 794



27240 Sperm Whale No. 48 ♂ Head (oblique down view)



27241 Same as No.796. 1332



27242 Sperm Whale No. 48 ♂. Stripping of blubber. 1333



27243 Sperm Whale No. 485 Blowhole tube exposed



27244 Sperm Whale No. 48 ♂. Mouth. 1335



27245 Sperm Whale No. 48 ♂ Same as 788



27247 Sperm Whale No. 48 ♂ Mouth open. 1338



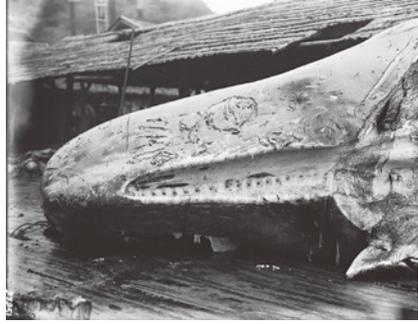
27248 Sperm Whale No. 48 ♂ Head (oblique down view). 1339



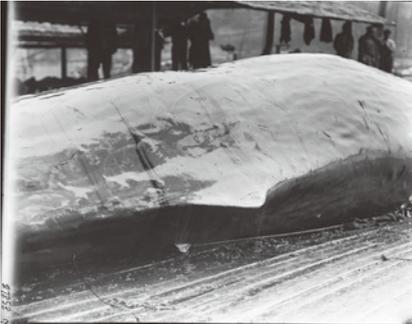
27249 Sperm Whale No. 48 ♂ Mouth



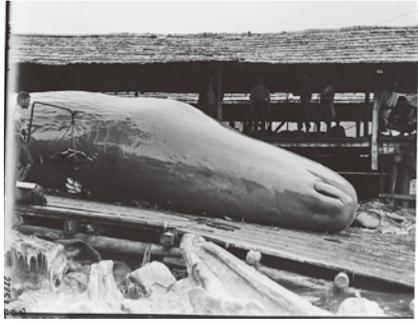
27250 Sperm Whale No. 48 ♂ Head (direct front view) 1341



27251 Sperm Whale No. 48 ♂ Roof of mouth showing teeth grooves. 1342



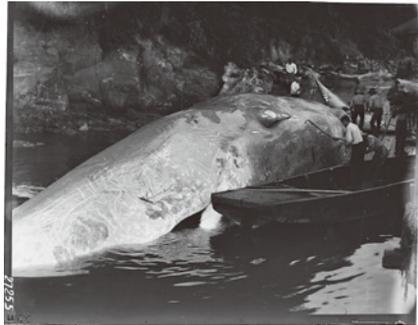
27252 Sperm Whale No. 48 ♂ Dorsal hump. 1343



27253 Sperm Whale No. 48 ♂ Top of head. 1344



27254 Sperm Whale No. 48 ♂ Genitalia and gray markings. 1345



27255 Sperm Whale No. 52 ♂ partly on slip. 1346



27256 Sperm Whale No. 52 ♂, partly on slip. 1347

[ネガ見つからず]

27257 Sperm Whale No. 52 ♂ Showing outs through blubber. [no plate]



27258 Sperm Whale No. 52 ♂ R.C.A. standing by head. 1349



27259 Sperm Whale No. 52 ♂ Flukes.



27260 Sperm Whale No. 52 ♂ Flukes and peduncle. 1351



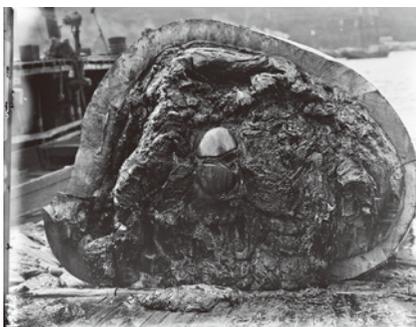
27261 Sperm Whale No. 52 ♂ partly out of water. 1352



27262 Sperm Whale No. 52 ♂ Head partly in water. 1353



27263 Sperm Whale No. 52 ♂ Mouth. 1354



27264 Sperm Whale No. 52 ♂ Base of head, (near view). 1355



27265 Sperm Whale No. 52 ♂ Base of head and Sta. Master. 1356



27266 Sperm Whale No. 52 ♂ head partly out of water. 1357



27267 Sperm Whale No. 52 ♂ throat furrows. 1358



27268 Sperm Whale No. 52 ♂ Removing the entrails. 1359



27269 Sperm Whale No. 52 ♂ Top of head, and blow-hole. 1360



27270 Sperm Whale No. 52 ♂ Pectoral fin. 1361



27271 Sperm Whale No. 52 ♂ Flukes (near view). 1362



27272 Sperm Whale No. 52 ♂ Drawing whale on to slip. 1363



27273 Sperm Whale No. 52 ♂ View of head and body to fin ; partly in water. 1364



27274 Sperm Whale No. 52 ♂ Posterior half of body on slip. 1365



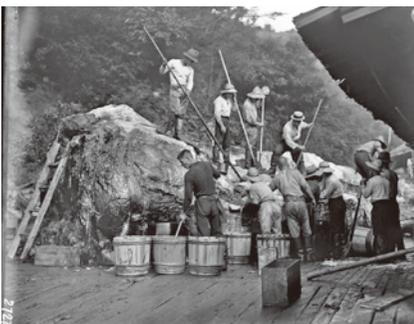
27275 Sperm Whale No. 52 ♂ Office force of station about head. 1366



27276 Sperm Whale No. 52 ♂ Genitalia. 1367



27277 Sperm whale No. 52 ♂ Head & Ito. master



27278 Sperm whale No. 52 ♂. Taking spermaceti from head. 1369



27279 Same as 907. 1370



27280 Sperm whale No. 52 ♂ Office force about head. 1371



27281 Sperm whale No. 52 ♂ Beginning to flense. 1372



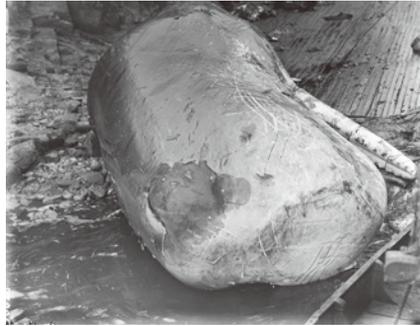
27282 Sperm whale No. 52 ♂ Removing spermaceti. 1373



27283 Same as 911. 1374



27284 Sperm whale No. 52 ♂ Stat, master beside head. 1375



27285 Sperm whale No. 52 ♂ ead showing blowhole. 1376



27286 Sperm whale No. 52 ♂ Lower jaw and throat furrows. 1377



27287 Sperm whale No. 52 ♂ Throat furrows. 1378



27288 Sperm whale No. 52 ♂ Mouth. 1379



27289 Sperm whale No. 52 ♂ Throat (near view) and tongue. 1380



27290 Sperm whale No. 52 ♂ Troat and tongue (far view). 1381



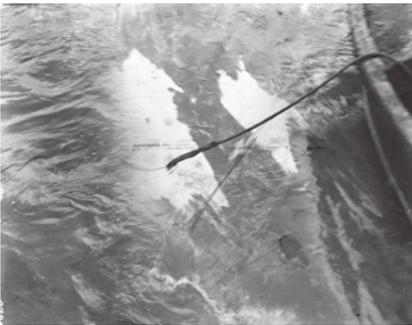
27291 Sperm whale No. 52 ♂ Head partly out of water. 1382



27292 Sperm whale No. 52 ♂ Sockets for teeth in upper jaw. 1383



27293 Sperm No 56. White patch near nava[e]l. 1384



27294 Sperm No 56. White patch near nava[e]l and on side. 1385



27295 Sperm No 56. White patch near nava[e]l and dorsal bump. 1386



27296 Sperm No 56 Female genitalia. 1387



27297 Sperm No 56 pectoral fin. 1388



27298 Sperm No 57- 3/4 front ventral view on slip.
1389



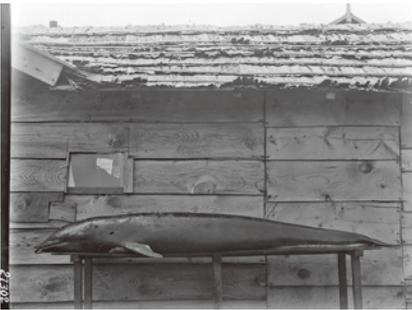
27299 Sperm No 57— 3/4 front ventral view ; on slip
(far view). 1390



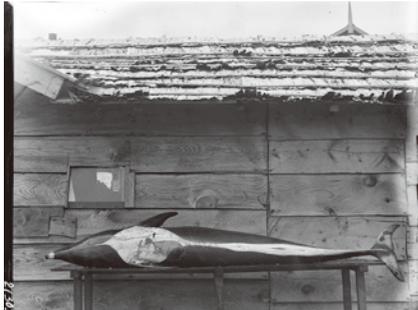
27300 Same as 942. 1391



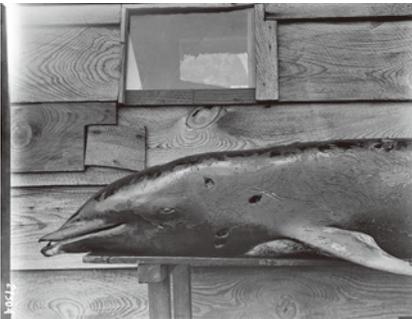
27301 Sperm No 57. Anterior half of body. 1392



27302 *Tursiops borealis* (Peale) side view No. 28 ♂.
1393



27303 Same as 640. Ventral view. 1394



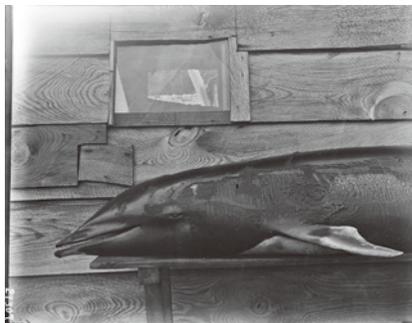
27304 L[T]*ursiops borealis* (Peale) side view No. 28 ♂
Head and body back to fin. 1395



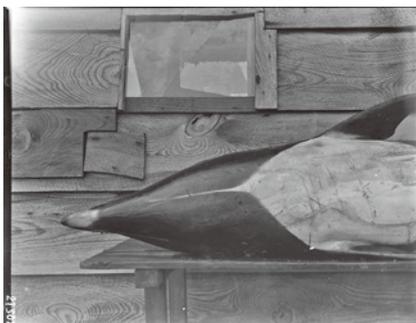
27305 *Tursiops borealis* (Peale) ventral view No. 27 ♂.
1396



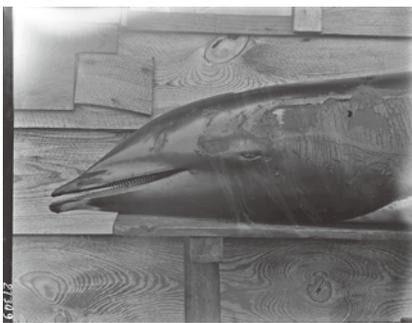
27306 Same as 643. Side view. 1397



27307 *Tursis borealis* (Peale) No. 27 ♂ Side view of head, body and fin. 1398



27308 *Tursis borealis* (Peale) No. 27 ♂ Ventral view of head. 1399



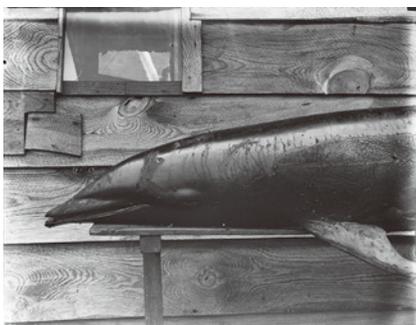
27309 Same as 646. Side view. 1400



27310 Same as 648. Ventral view of throat and breast of No. 29 ♀. 1401



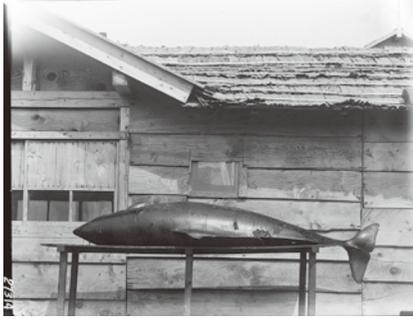
27311 *Tursis borealis* (peale) No. 29 ♀ Ventral view of whole body. 1402



27312 *Tursis borealis* (peale) No. 29 ♀ Side view of head and body back to fin. 1403



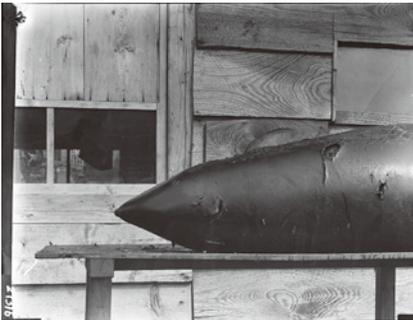
27313 *Phoc[on]a* N. sp? No. 32 ♂ Left side view of whole body. 1404



27314 Same as 660. Dorsal view. 1405



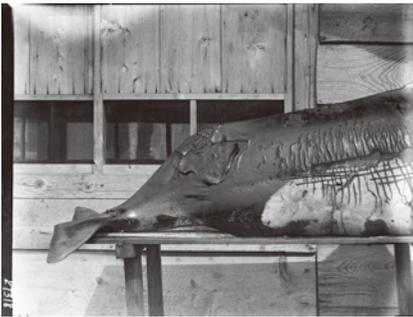
27315 Same as 660-1 Ventral view. 1406



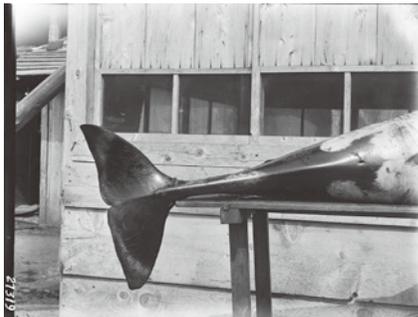
27316 Phoc[oc]ena N. sp? Dorsal view of head. (No. 32 ♂). 1407



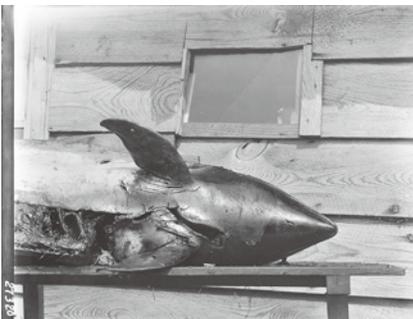
27317 Same as 663. Side view of head. 1408



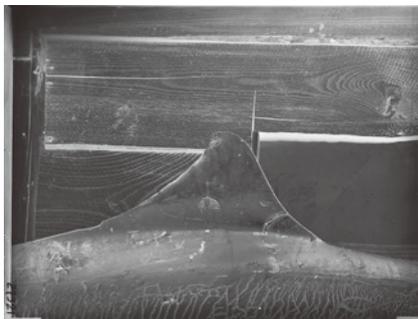
27318 Phoc[oc]ena N. sp? No. 32 ♂ Side view of s[p]eduncle. 1409



27319 Phoc[oc]ena N. sp? Ventral view of peduncle (No. 32 ♂). 1410



27320 Phoc[oc]ena N. sp? No. 32 ♂ Ventral view of head. 1411



27321 Phoc[oc]ena N. sp? No. 32 ♂ Side view of dorsal fin. 1412



27322 *Phocoena* N. sp? No. 32 ♂ Side view of pectoral fin. 1413



27323 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Ventral view, hanging. 1415



27324 Same as 723. Dorsal view, hanging. 1416



27325 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Lateral view, hanging. 1417



27326 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Lateral view, hanging. 1418



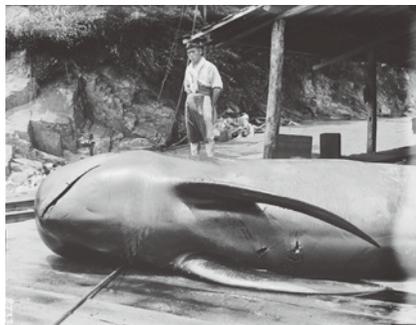
27327 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Lateral view head. 1419



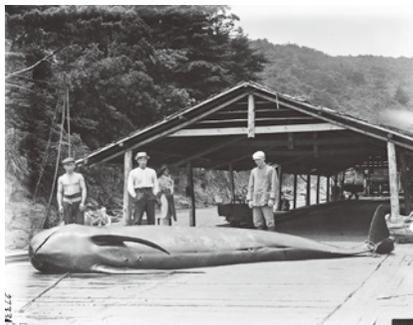
27328 Same as 727. 1420



27329 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Forsal view flukes. 1421



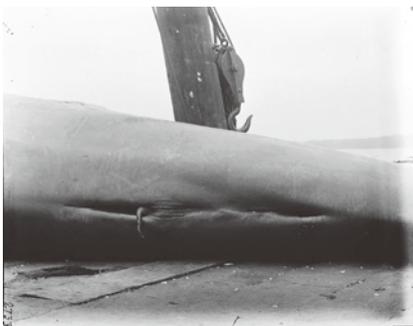
27330 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Ventral view of breast and throat. 1422



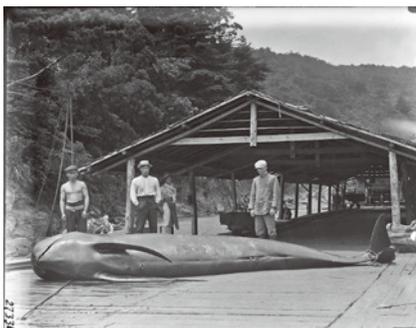
27331 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Ventral view of whole body. 1423



27332 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Blowholes. 1424



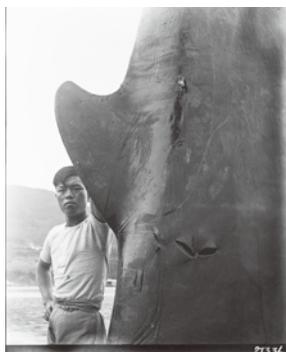
27333 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Genitalia. 1425



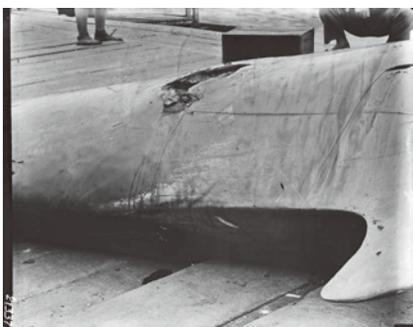
27334 Same as 703. 1426



27335 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Blowhole. 1427



27336 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Dorsal fin. 1428



27337 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Dorsal view showing gray spot. 1429



27338 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Pectoral fin. 1430



27339 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Peduncle (suspended). 1431



27340 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. 3/4 view of head. 1432



27341 *Globiocephalus accammoni[s]cammoni* Near view of head. 1433



27342 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. Near view of throat. 1434



27343 *Globiocephalus a[s]cammoni* Cope. R.C.A. sitting on body. 1435



27353 View of yard showing whale meat drying on sacks. 895



27354 Cutting slip, Aikawa. 896



27355 Drawing Blue Whale on to slip. 1294



27356 Blue Whale No. 55 ♀ drawn on to slip. 3/4 posterior view. 1295



27357 Aikawa whaling station from hill in rear.



27358 Whaling ship "Akebono Maru". 898



27359 Whaling ship "Airondo Maru". 899



27360 Capt. Reider Jacobson at gun, ("Airondo"). 900



27361 Whaling ship "Fukashima Maru". 901



27362 W. S. Aironds Maru". 902



27363 Two cutters, (Kaibus[o]-fu) . 903



27364 Harpoon gun "Rekkru Maru". 904



27365 Trial shot "Ne Taibai Maru". 905



27366 Trial shot. Harpoon in air. 906



27367 Same as No. 689. Trial shot with the barfour gun. 907



27368 Loading gun in rain. 908



27369 Whaling fleet at Aikawa. 909



27370 Group of gunners at Aikawa. (Outside) 910



27371 Swordfish No. 49. View of entire back. 911



27372 Phocoenoides trees[truei]. Side view 1414



219190 Head of sword-fish



219191 Sword fish



219192 Sword-fish



219193 Towing Whale to Station



219194 Female sperm whale. Japan

26974-26975, 26990-26995, 27009 は、ネガが破壊されており存在しない。